

# 日本醫史學雜誌

第 11 卷 第 4 号

昭和 40 年 11 月 15 日發行

## 原 著

- わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響 ……阿知波五郎…(1)
- 杉田玄白述の犬解嘲について ……………片桐 一男…(27)
- 童子経と救療経にみられる鬼神について ……………杉田 暉道…(40)
- 庶物類纂の成立と伝本 ……………福井 保…(45)

## 資 料

- 東京医大蔵貴重古医書解題……………矢数 道明…(55)  
石原 明
- 寄贈書紹介……………(39) (53)
- 例会記事……………(59)

通 卷 第 1362 号

## 日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷 2~1  
順天堂大学医学部医史学教授室内  
振替口座・東京 15250 番

# わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響

(第六四回日本医史学会総会特別講演原著)

阿知波五郎

## 第一章 総論(南蛮、紅毛、蘭学及び洋学の系譜)

- 1 南蛮、及び蘭方期の医学思想
- 2 蘭学医学思想の基盤

### (1) 第一期 ライデン学統受容期

(a) ライデン学統の源流〔蒲爾花歌、万病治準〕

〔蒲爾花歌、万病治準〕の思想

(c) ライデン学派(ゴルテルの思想)

(d) エヂンバラ学派(ヒコサムの思想)

(e) ウイン学派(プレんキの思想)

(f) ライデン学派の機械論とハラー学説)

### (2) 第二期 生氣論医学移入時代

(a) フーフランドの思想

(b) その他の生氣論医学訳書(ブリユウメンバック、

コンスブルック、ローゼ、コンラヂ、スブレング

ル)(附) ビスコフ(昆斯骨夫)について

(c) 生氣論の医学思想(カントとの関係)

(d) 「利撰蘭度、人身窮理書」の意義(ビシヤの紹介)

(3) 第三期 病理解剖を基盤とし、細胞思想確立

の時代(レベルト、ストロマイエル、

ニーメイエル、クンツエ、フリント、

ハルツホルン、フライ)

(4) その他の医学思想(扶氏「医戒」、ハイステ

ルの「外科史」の意義、(以上本号

掲載)

## 第二章 各論

## 第三章 ヨーロッパ医学思想受容の経過

## 第四章 結論

(第二章以下逐次連載)

# 第一章 総論

## 一、南蛮及び蘭方期の医学思想

蘭学期以前の医学思想は、ヨーロッパ中世までの医学の根幹をした四体液病理説である。それも詳細に論じたものはなく、サンギ、コレラ、ヘレマ、マレンコンヤのようにラテン語そのままを使用して紹介したものか、或は熱寒風痰の四性を之に当てているか、或は四血として簡単に紹介しているに過ぎない。勿論、沢野忠庵天正八年—慶安三年の「南蛮流外科秘伝書」写本（富士川本）にも熱寒風痰見様があり、カスパル流、吉永流にも、その紹介があり、比較的形の整った「阿蘭陀外科指南」浪華陰舎著（著書蔵）元禄九年の紹介などは従来屢々問題にされて来た。しかし、その底本である「阿蘭陀外科全書」山村宗雪著（富士川本）写本 さらにはその抄本である同名書山村宗雪原著二卷元禄九年（富士川本）写本、大町宗卜撰、写本、一六九六、これが南蛮、阿蘭陀両系の入り混った書である。

これらを綜合してみるに南蛮期は勿論、その阿蘭陀期への移行期にも夫々独立して紹介があつて、ルネサンス期の名医、フランスの Ambroise Paré（安蒲児矢斯、八啞列）、（一五一〇—一五九〇）から移し入れた有名な檜林鎮山慶安元年—正徳元年の「外科宗伝」写本 嵐山本、渡辺本、長崎本、一七一一 にも四血として挙げてある。何れにしても「凡人身之腫瘍生者依於一身四血凝滯、内成諸病発、外為諸腫瘍」の病理観が行れた。しかし、当時の医学思想の中心は崇川、陳実功毓仁文纂著の「外科正宗」などの漢方書による事実は動かしがたい（わが国にも後れて萩野台州校正「外科正宗」寛政三年 一七九一 再刻や伊良子光顕校の「新刻秘授外科白効全書」六冊 竜居中編 宝曆三年序（一七五三）の刊行が見られる。）

きりしたん外科を離れて、このように忠庵系、栗崎系が行れたが、栗崎流は実用書が多いのに反し、忠庵系はややヨーロッパ的な思想の片鱗が見られることは事実である。しかし栗崎流が忠庵系よりも学統としては長く続く。これらや、蘭方は飽迄、所謂「耳聞面晤」の医方である。しかし吉雄耕牛享保九年—寛政十二年一七二四—一八〇〇の出現によって、漸く蘭書直接からの移入が行れてきたことは、よく知られている。この時代から得られたものは、解剖学のような基礎的なものを除き、ヨーロッパから受容した臨床学はすべて次の三つの系統に入れうる。

## 二、蘭学医学思想の基盤

ヨーロッパ医学を移し入れた、わが蘭学の医学面は蘭学について一般に言われているように、実学が主で、医学思想として受容されたものは、幕末に近い一九世紀に入ってからで、それも開板のものには少く、未開板の稿本訳書に多い。蘭学医学思想の基盤は大別すると次の三時期に分けることができる。

- ① ライデン学統医学移入時代
- ② ドイツ生気論医学移入時代
- ③ 病理解剖を主体とした医学移入時代

第一の時期は、一八世紀前半の全ヨーロッパを席捲しつづいた Hermann Boerhaave (蒲爾花歌) 一六六八—一七三八を宗家として、オランダのライデンで栄えた学統であって、それはオランダのライデンを始め、ドイツ、スイス、ウィーン、イギリスのエヂンバラ、さらには蘭学には無関係であるが、エヂンバラ学派を通じて、アメリカ医学の起始にもなる巨大な学統である。これは蘭学期に最も長期間、わが国に影響を与えた。新宮涼庭の「窮理外科則」我爾德兄著 格爾文増訳 十三篇二十六冊 文政五年—嘉永三年一八二二—一八五〇 (宗田本) の最終巻の出た嘉永三年 (一八五〇) まで、凡そ一世紀の長期間、わが蘭学はこの学統の影響を受けた。

第二の生気論時代は、緒方洪庵文化七年—文久三年一八一〇—一八六三を中心として、移し入れられた。その期間は比較的短く、約四〇ヶ

蘭学医学思想一覽表 (訳書から見た) (表第一)

		南 蛮 和 蘭	移行期	栗崎系 忠庵系 金瘡部	南蛮流栗崎金瘡本末撰考 南蛮外科秘伝 紅毛秘伝療治集 阿蘭陀外科全部 阿蘭陀外科指南	
時代 (ヨーロッパ)		オランダ, ドイツ及スイス	ウ イ ー ン	英, 仏 (米)	日本受容年代	
16世紀				Ambroise Paré (安蒲兒矢斯, 八啞列)	宝永3年 1706	
17世紀		Jean Baptist Helmont (歇爾蒙突) Stephan Blankart (武蘭加兒)		Thomas Sydenham (舍電汎)		
十八世紀	ライデン学統時代	Johann Adam Kulmus (鳩盧模斯) Hermann Boerhaave (蒲爾花歇) Friedrich Hoffmann (弗昆埤兒比, 忽弗滿) Georg Ernst Stahl Albrecht von Haller (法兒列爾) Simon André Tissot (室速篤) Johaän de Gorter (我爾德兒)	Gerard Van Swieten (斯徵甸) Anton de Haen Anton Stoerck (斯篤兒) Maximilian Stoll (斯篤兒) Joeseph Jacob Plenck (布連吉)	スウェーデン Cerl von Linné (林那烏斯) Gohn Huxham (王函夫古撒謨) William Cullen (鳩盧連)	1750頃	ライデン学統医書翻訳時代
	生氣論	Johann Fsiedrich Blumenbach (貌律面拔苦) Christoph Wilhelm Hufeland (扶歇蘭土) J.A. Tittmann (蟄杜滿) Samuel Hahnemann (哈涅滿)		John Brown (貌樂運) Philippe Pinel Edward Jeuner (庇涅兒) Marie François Xavier Bichat (昆加咄)		
	時代	Theodor Georg August Roose (拉設) John Wilhelm Heinrich Conradi (公刺地) Georg Wilhelm Christoph Consbruch (昆斯貌律窟) Kurt Sprengel (察別王連然兒)		Renè Théophile Hyacinthe Laännec Anthelme Balthasaor Richerand (利撰蘭度)		
	学病時代解剖ニヨル医	Hermaunn Lebert (列薩爾篤) Georg Friedrich Louis Stsomeyer (斯篤魯默兒) Felix Ferdinand Künze (摺設) Heinrich Frey (普侖)		Samuel David Gross (愚魯斯) Austin Flint Edward Hartshorn Thomas Henry Green (虞里庇)	1850年 1855年	

年前後であるが、訳書の数も多く、明治初年の近代医学期に最も関係深く、且関連性がある時代である。主としてドイツの C. W. Hufeland (扶歌蘭士) (一七六二—一八三六) を中心として、一八世紀後半から一九世紀初頭に亘って主としてドイツで行われた医学である。

第三の病理解剖を中心とした医学は Hermann Lebert (列薩爾馬) (一八一三—一八三四) 以下、近代ドイツ (一九世紀前半) のものを主とし、明治に入って蘭学を離れて、一時英米医学を移入する時期に入る。

以上が解剖学を除いた医学全般について当時の蘭学医学をヨーロッパの源流から観じた結果である。

### 第一期—ライデン学統受客期

Boerhave (浦爾花歌) は前述したように、一八世紀前半、全ヨーロッパを風靡した巨人である (よく引用されるように、中国から「ヨーロッパのブルハーヴェ様」として出した手紙が届いたという逸話は、その間の事情を物語っている)。すでに蘭学期以前に耕牛が Joseph Jacob Pleuck, 1738—1807 から「紅毛秘事記」写本 (宗田本、富士川本) を移し入れ、又、耕牛が愛読していた Lorenz Heister (老樗斯、協乙斯的盧) (一六八三—一七五八) が「解体新書」以前に江戸にあった杉田玄白らによって、その挿絵を写しとっていたことは「蘭学事始」写本 などにも出ている。これは玄白の「瘍家大成」写本一冊 (安永八年 (一七七五) 富士川本) にハイステルの乳癌手術図以下五図が出ていることによっても明らかである (この図が華岡青洲 宝曆十年—天保六年 一七六〇—一八三五 などの乳癌手術実施に与えた影響は大きい。そして、当時未だ玄白は蘭書読解ができなかった時代である)。加賀の吉田直心 (長淑) 訳「泰西熱病論」七卷六冊 文化二年 (一八〇五) 富士川本 はライデン学統中のエデンバラ学派 John Huxham (玉函夫古撒謨) (一六九二—一七六四) やハイステルの「瘍医新書」序目、他三卷 四冊大槻玄沢訳 老樗佐、協乙速的盧著、文政八年 (一八一八) 富士川本 など、又、ウィーン学派の Gerhard van Swieten (斯微甸) (一七〇〇—一七七二) の「西医治要」四卷 一八一八 蘭訳 文政八年 宇野 廣生 (蘭齋) 訳、(一八二五) 富士川本 など、何れも皆ライデン学統であるが、とくにウィーン学派のプレんキ (前出) やライデン学派の Johann de Garier (我爾徳兒) (一六八九—一七六二) などの訳書が陸續出現する (ライデン学統蘭学訳

ライデン学統及びその蘭学訳書表(表第2)

Hermann Boerhaave, 1668—1738. { 坪井信道訳「蒲爾花歌, 万病治準」 { 稿本21冊  
 { 新宮涼庭訳「万病治準」 { 文政9年(1826)

① ライデン学派

Johann de Gorter, 1689—1762 { 新宮涼庭訳「窮理外科則」13編 文政5年—嘉永元年  
 (1822) — (1830)  
 訳者不明「外科精要」11巻6冊写本  
 吉雄永保「外科精要」5冊, 写本  
 宇田川玄随訳「西説内科撰要」15冊, 寛政5年(1793)  
 同上「重補西説内科撰要」18冊文化7年(1810)

② ウィーン学派

Gerhard van Swieten, 1700—1772 { 坪井信道訳「蒲爾花歌万病治準」 21冊写本  
 文政9年(1826)  
 { 宇野広生訳「西医治要」 4巻6冊  
 文政8年(1825)  
 { 高謙齋訳「泰西軍中備用方」3冊, 写本  
 { 箕作阮甫訳「斯微旬, 発斑熱」写本, 1冊文政8年

Anton de Haen, 1704—1770  
 Anton Storck, 1731—1803

{ 西吉郎右衛門訳「シキューター説」写本, 1冊  
 { 箕作阮甫訳「医方研幾」写本, 1冊

Joseph Jacob Plenck, 1738—1807

{ 吉雄耕牛訳「布敷吉徽瘡論」写本1冊  
 { 大槻玄沢訳「大西徽瘡方」写本1冊  
 { 杉田立卿訳「徽瘡新書」5冊文政4年(1821)  
 { 杉田立卿訳「和蘭眼科新書」巻5, 6冊文政3年  
 (1820)  
 { 藤林普山訳「離合源本」3冊, 写本  
 { 杉田立卿口訳・杉田成卿筆記「泰西医源」巻11, 6  
 冊, 文政4年(1821)  
 { 杉田立卿訳「瘍科新選」5冊, 天保3年(1832)  
 { 新宮涼庭訳「外用方府単方編」3冊, 安政6年  
 (1859)  
 { 新宮涼庭訳「解体則」序目, 巻8  
 { 新宮涼庭訳「人身分離則」3冊, 安政6年(1859)  
 { 新宮涼民訳「小兒全書」3巻, 3冊, 安政4年  
 (1857)  
 { 高野長英訳「徽瘡摘要」高野長英全集第2巻

③ エヂンバラ学派

John Huxham, 1692—1764 王函夫古撒謨, 吉田直心訳「泰西熱病論」7巻6冊文化11年(1814)

④ ドイツ学派, ゲッティング学派

Albrecht von Haller, 1708—1777 (法児列強として, 18世紀後半の生氣論訳書の何れにも紹介されている。)

⑤ ドイツ学派, アルトドルフ及ヘルムステット学派

Lorcnz Heister, 1683—1758 { 大槻玄沢訳「瘍医新書」首上中下4冊 文政8年(1825)  
 { 大槻玄沢訳「増訳八刺精要」佐々木知芳増訳文政8年  
 越邑德基訳, 牧墨選図「瘍科精選図解」2冊文政3年(1820)  
 { 杉田玄白「瘍家大成」写本1冊, 安永8年(1779)写本,  
 大槻齋里(茂植)訳「要術知新」3冊, 文政6年序(1823)  
 { 大槻齋里訳「外科取功繙帯図式」文化10年跋(1813)

⑥ アメリカ学派 John Redman, 1722—1808

⑦ 日本 { 坪井信道, 1795—1848……日習堂(蒲爾花歌 万病治準)  
 { 新宮涼庭, 1787—1854……順正書院(万病治準)

書表参照)。そして、その訳書出現の経過をみると、当然のことながら、当時の訳者は思想的に同一系統の医学であることとの自覚がなかったと判断せざるをえない。

### ④ ライデン学統の源流

ライデン学統の源流を求めんとする自覚が生じて、これらの学統の源流を求めよとの因をなすものは、前記「西医治要」だと判断される。即ち、ハン、スウィーテンの本(前出)は蘭館日記文化十年一八一三四月二日の項にゴルテルの本と共に、幕府から熱望されている。このように、この本は訳書が出る前から繁用されていた。従って二二年後に蘭齋が訳したが、高謙齋も亦同一書を訳して「泰西軍中備用方」三冊・写本富士川本(富士川本)とした程である。Kurz Beschreibung u. Heilungserit d. Krankheiten, welche am öftesten in dem Feldlager beobachtet werden, Wien. 一七五八が原著で、一七六二年には英訳もされている。蘭齋の訳本は蘭訳第五版(一七八〇)からの重訳である。その中に「世界ノ名医ハンスウィーテン名声高キガ故ニ……」とし、さらに蘭訳者ハンテルハールの解説には本書が「フルハーヒヤンス」の説を採ったものであって、「此書ノ翻訳一七六〇年六月、五篇トシテ上木、ブルハーヘ七三歳……」の記事が見え、ブルハーヴェの偉大な存在をよく表現している。これらから得た当時の蘭学者らが、ブルハーヴェの著書に触れ度いとの機運から、遠く溯って、ブルハーヴェの著書を求め、その訳業が成就する。ブルハーヴェの著書は少いが、とくに、よく行われたものは二種の著述である。その一つは、Institutiones medicae in usus annuae exercitationes domesticos, 1708, F. van der Linden, その蘭訳がCornelis Love 蘭訳、De geneskundige Onderwyzingen van den Hermann Boerhave, 一七七八(京大、新宮本)であり、他はAphorismi de cognoscendis et curandis morbis Lugduni Batavorum, F. van der Linden, 一七〇九、である。そしてこのAphorismiはブルハーヴェの最も代表作である。従って、この本をブルハーヴェ門下の逸材スウィーテン(前出)が註を施し、約三十四年の年月をかけて出版したCommentaria in Hermann Boerhave aphorismos, de cognoscendis et curandis morbis, 6 vols Lugduni Batavorum, F. H. Verbeek, 一七四一—一七六、となる。この蘭訳が、



ハン・スウィーテン著訳の和訳(表第三)

Gerhard L. B. Van Swieten : Kurz Beschreibung und Heilungsart d. Krankheiten, welche am öftesten in dem Feldlager beobachtet werden. Wien. Prag. Triest. 1758(英訳1762)

西医知要並附録 ヤコブ、ハン デルハール蘭 宇野広生、蘭齊 和	ハール序、ハン、スウィーテントプ ルハールへ。	スキーン序、軍中、船中衛生。 十一項目、軍陣衛生細目記述	卷之一 軍中病総論 咳嗽篇 咽喉腫篇(喉風)	(刺絡) 膿胸 痛肋膜焮痛篇	卷之二 肺焮腫篇	(胸腔穿刺)聖京健篇(痛風) 往来熱篇(瘧) 往来春秋熱篇 三日熱篇・黄疽篇 水腫、鼓脹、胸水、腹水篇、 嘔吐篇、霍乱篇	卷之三 下利篇、痢病篇 腸焮腫篇、譫妄熱篇、衄血篇、 稽留熱篇、壊血病篇 熱脱疽篇、微毒篇、 疥癬篇、蛔虫篇、	卷之四、葉劑篇(通計七十一方)	卷之五、アンゲリア經驗方ハール撰述 上下都テ五十八方	帝王侍御臣ゲラルドバロン、ハン、ス ウィーテン撰ヤコブ、デル、ハール 蘭訳五版一七八〇年「アムステルダ ム」ヘン德里キ、ガルトマン書肆発 行	文政乙酉(一八二五)孟冬鏤
---------------------------------------	----------------------------	---------------------------------	------------------------------	----------------------	----------	-----------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------	-----------------	-------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------	---------------

〔梅毒記 載詳細〕	〔病院熱 固固熱〕	〔寒熱計 空氣計〕	〔腹水針 トロイカ〕	〔解熱皮 キナキナ〕	〔胸助間 穿孔術〕	打膿法]	pleuritis, Pn. Neuralgie	アンギーナノ文字アリ 〔滋養注腸〕	〔瀉血 用時代〕
				「西医知要」ノ他ニ 「泰西軍中備用方」 三冊、蘭、スウィーテン著 ハール増補 高謙齋訳 写本、(和中) 附、泰西軍中備用方附方 (スウェイテン) 軍中療方(ハール) ガアル。	「西医知要」ノ他ニ 「泰西軍中備用方」 三冊、蘭、スウィーテン著 ハール増補 高謙齋訳 写本、(和中) 附、泰西軍中備用方附方 (スウェイテン) 軍中療方(ハール) ガアル。	○其ノ註ニ曰ク 「此書ノ翻訳千七百六十年六月五篇 トシ上木『プールハール』七十三歳 ……」 ○スキーン自序ニ、「軍陣衛生上最 モ漸新、特ニ軍陣外科ニ関スル」旨 ノ記載ガアル。	○世界ノ名医ハンズウィーテン。 「名声高キガ故ニ……」 ○蘭訳者、ハンデルハールノ序文中ニ 「プールハールヒヤンス」ノ人名ガア ル	○自主的ナ翻訳ト判断スル。 ○世界ノ名医ハンズウィーテン。	

Verklaring der Korte Stellingen van Hermann Boerhaave, onder de kennis en geneezing der Ziekten, 1760—61, (東北大、狩野本)である。

前者“*Institutiones*”を重訳したのが、新宮涼麿の「万病治準」であり、従来「万病治準」といえば、*Institutiones*のみが原著と考えられていた。後者“*Aphorisms*”の註(*Commentaria*)を施したブルハーヴェの蘭訳本、“*Verklaring*”が坪井信道の重訳した「蒲爾花歌、万病治準」稿本二冊、文政六年—文政八年 一八二三—一八二五 (著者蔵)である。そして、新宮涼麿は前記「万病治準」を底本として、順正書院に於て蘭学を講じ、坪井信道は後者の「蒲爾花歌、万病治準」をもって、その学舎、日習堂をひらいた。涼庭の「万病治準」は著者の努力にも拘らず、未見に終わったので、後者、信道の「蒲爾花歌、万病治準」によって述べる。(阿知波五郎著、坪井信道訳「蒲爾花歌、万病治準」の研究 医譚復刊第二八号 昭三八、一二、一 参照)。しかし、同訳はスウィーテンの註が施され、二冊の大きい訳業で、当時の医学思想を知る唯一の資料である。

この訳書は遂に開板されるに至らなかったが、尚多くの写本が現存しているし、曾て著者の調べた山口県の華浦医学校蔵書の由にも認められた事実から考えても、当時よく行れたものとされる。

耕牛の「紅毛秘事記」以来、数多くの訳書を見るに、繊維といひ、単繊維病といひ、或はコールツといひ、腐敗病といひ、元質(元実)といひ、閉塞といひ、又靈液、脉動の生理も、頻脉の病理も、熱病や刺絡の理論も、いやしくも、ライデン学統からの訳書に現れる思想的解明は、本書なくしては理解困難である。即ち、約一世紀の長い期間、わが国に行れた蘭学(医学)は、この訳書を得て、俄然医学の形態を整えるに至る。その意味から、この訳書の出現は、蘭学臨床学にとつては劃期的な史的意義を持つ。信道は当時、宇田川榛齋門にあった(入門は二七歳、訳業完成時は三一歳)。この訳業は榛齋の奨めによつたものであろうが、当時の蘭学の視野がここまで到達していたものと認められる。

#### ⑥ 「蒲爾花歌 万病治準」の思想

本訳書は蘭学期に初めて行われた医学論である。全般を通じて *Hippocrates* の自然哲学的のものが根幹をなしている。そ

して理論的にはデカルト的<sup>③</sup>であり、それにプールハーヴェは同国の古典顕微鏡家 Antony van Leeuwenhoek, 1632—1723 の主治医であり、友人であつたので、逸早く顕微鏡を臨床に応用した(第三章、九四章)。又 Marcello Malpighi, 1628—1694 の観察を採っている(第九八章)。さらに、この世紀の特徴として、各医師がそうであつたように、自伝的に医学修得以前に哲学の過程を経ている。「纖維ハ土質ノ元実ノ如クナルモノナリ。然レトモ此元実ナル者ハ極小ノ碎粉ナルユエニ多ク接続スルニ非ラザレバ纖維ト為ル事能ハズ」(第二十一章)。顕微鏡観察で得た五体は「纖維」から成るとし、さらに、その極微単位(細胞思想)を「元実」(元質)と仮定している。「纖維ハ本ト極小ノ分子長形ニ相接シ成ル者ナリ。此分子ハ極小無比ナルユヘニ其分散セル者、一個ヲ取テ人力ヲ究メ、幾多ノ術ヲ費スト雖モ更ニコレヲ分離破碎スル事能ハズ。此物ヲ名ヅケテ纖維ノ元実ト謂フ。凡ソ元実トハ物ヲ分割シテ其極小ニ至ル者ヲ謂フナリ」。これは當時のスピンノーザ的な極微思想の現れである。ライデン学派の纖維学説はかくしてデカルトの医学に、顕微鏡によって得た実験成績とを綜合して成立したものである。但し顕微鏡の毛細管内循環の観察は前述のマルピギイの実験にならつたものであるが、これらの観察から尿管の狭少、閉塞は血球と尿管壁との摩擦を来し、ここに焔衝(炎症)が惹起する。この尿管狭少及びその為によって起る摩擦は発熱の成因となり、他方心臓の搏動の増加を来し、ここに頰脈が現われる。従つて炎症と頰脈とが表裏一体である(第九九章)。

とくに、プールハーヴェは第九冊から最終の第二一冊迄の、本書の過半部分を哥兒質(Febri)論にあてている。史上既に有名であるように「驗冷熱」を逸早く臨床に応用している(第五六三章)。その為には健常脈数を厳密に測定し、「健康成年静坐ノ人ニ於テ、二(セコント)ノ間、大低三脈動ヲ得、故に半学ノ間、得ル処大低三六〇動トス」(第五七三章)として、発熱論の基礎を計測的、科学的なものとしている。

プールハーヴェは臨床態度に於て、臨床観察の正確なる把握を第一義的なものとする。スウィーテンは碩師(プルーハーヴェ)は失契任膚(シケイヂンフ——自然良能によって「体中非常ノ攪擾ヲ得、病卒然トシテ愈ル」)の経過を詳さに観察するを臨床の骨子としているという。「那去爾」(自然)の良能を尊重し、術を以て無益に失契任膚を制止しない

ことを最重要視している（消化生理の「<sup>マター</sup>享熟」や病毒を次第に弱体化する「<sup>レイフマーキング</sup>化熟」、或は「浄熟」等、皆自然良能に  
関する術語である）（第五八七章）。要するに依卜加刺得私、ガレニュースの説を受容し、自然良能を第一義的のものとは  
するが、アスコレビアデスの「絶糧の法」は厳に戒しめる（第六〇一章）など、常にその受容には批判的で、冷静な態度  
を示している。

プールハーヴェを宗とするライデン学統のみが蘭学の主流をなしたことは、異とするところである。当時の系統学派に  
は他に Friedrich Hoffmann（弗昆埜児比、忽弗満）、一六六〇—一七四二や Georg Ernst Stahl, 1660—1744 のような巨人  
がいたが、ホフマンを前述の如く弗昆埜児比、忽弗満として、訳書中「万病治準」以外の諸訳書に散見するのみで、  
それらの訳書が現われなかった。従って、その直接の学統も、蘭学訳書には現われない。それは蘭学の特質である。

このようにライデン学統は織維学説に基く医学であって、当時の顕微鏡技術に於ては、遂に「細胞」を確認しえなかつたが、「元実」として、これを仮定し、当時の蘭学者たちもそれを受容していた（小森桃鳩述の「病因精義」のように各書綜合書にも、巻之一の織維（第三）に「属子」として述べている。

訳書中最もよく現れるのは「イギリスのヒポクラテス」と称された一七世紀の巨人、Thomas Sydenham（<sup>シデンハム</sup>舎電汎）、一六二四—一六八九と、「パラツェルズスの再現」とされた Jean-Baptist van Helmont（<sup>ヘルモンツ</sup>歌爾蒙突）、一五七七一—一六四四である。前者の正確な疾病史の認識と疾病の症候による分類、さらに伝染病に於ける素質的なものによる「genius epidemicus」を採り、後者からは archaicus 説（<sup>アキウス</sup>垂爾加欧斯）と、前述の「哥爾都」（<sup>コルダ</sup>腐敗思想）を採っている。

### ◎ ライデン学派

Johann de Gorter（<sup>ゴーター</sup>玉函涅斯埜我爾德兒）、一六八九—一七六二はわが国内科学のはじめの訳書として、「西説内科撰要」  
玉函埜斯涅我爾德兒著、寛政五年序一文化七  
宇田川玄随訳 一七九三—一八一〇刊一八卷（著者蔵）その凡例に「収頭腦之部則已知其原因之所在也」のように内  
景に從って、その病因を論じていることを強調し、「須読解体書於旧習之外更建一新局」とし、ライデン学派の説を証し

ている。とくに巻一は「塞熱篇」であって、当時（一八世紀）に熱論が最重要テーマであり、その説もプールハトヴェキの「治準」によっていることが明らかである。「哥爾都ハ羅甸ニ是ヲ歌貌立私と云」から始めて病因、區別、治法に及んでゐる。これは「治準」の哥爾都論に一致している。巻之五の第一二、水腫篇の如きもプールハトヴェキの dynamisch な思想「閉塞論」から成立している。頭病を論じて、「熱毒多ク頭ニ（血ヲ）送ル事ヲ為シ、或ハ頭ニ滯住スルニ至テハ」則ち頭部鼓動して頭痛が起る。従つて刺絡すべし（巻之八、一二三）。これもライデン学統の機械論である。文中ヒポクラテス（非剝葛刺室伽）の医術篇は再三引用している（巻之九一四六及び一四三）。靈液を神経液とし、纖維を細筋纖維とする。しかし、全一八巻中プールハトヴェキの名は一度も挙げていない。

宇田川玄随を経て宇田川榛齋著の「遠西医方名物考」凡例中五丁裏には植物学の簡単な歴史が述べられてあるが、その中に「蒲爾花歌」及び「林娜私」が出てくる。従つて「名物考」の出た文政五年一八二二には巨壁として、プールハトヴェキを知つていた筈である。プールハトヴェキを大いに賞揚している「西医治要」（前出）が文政八年一八二五と相前後している頃である。従つて大体一八二〇年頃には、一部の蘭学者にはプールハトヴェキの名が知られていたことは誤りない事実である。

前記「内科選要」を増補重訂した宇田川玄真の校註には明らかに、すでに生氣論が入っている。即ち、第一巻、第七章「熱病ノ治法ヲ論ス」の自然良能を重視すべき論説の校註に「生氣ノ運行は即チ有生ノ始ヨリ全身ニ稟ル所ノ生治ノ元運氣ナリ。和蘭ニ是ヲ「レーヘンス、ベウエーギンギト云」とし、以下「生氣」の説明がある。同じことが又、宇田川榕庵校訂の「新訂増補和蘭藥鏡」についてもいえる。即ち、その巻一の凡例三丁には「生氣」「元運生氣」が掲げられ、その説明がある。勿論、「藥鏡」増補版には引用文献中に「扶歌蘭度」前出が出てゐるし、文政七年（一八二四）に出た小関三英訳の Georg Wilhelm Christoph Consruch（昆斯貌律窟）、一七六四—一八三七の「泰西内科集成」写本（著者蔵）があるから当然のことである。しかし、このように著しく機械論である織維学説のライデン学統の訳書に生氣論的な校註が追加される矛盾が当時は公然と行われていた。つまり、ライデン学統移入末期と生氣論移入の移行期には全く断然たる思想系の自覚がなかつたのである（南蛮、阿蘭陀両期移行期参照）。

## ④ エチンバラ学派

ライデン学統の中で、エチンバラ学派として、わが蘭学に受容したものは John Huxham (玉函夫古撒謨)、一六九二—一七八二の有名な *An essay on fevers*, London, 1750 である。「扶古撒謨」は藤林普山訳「西医今日方」などにも引用され、当時よく行われていた。発疹チフスと腸チフスの記載、第二版にはインフルエンザの記載が現れるなど、劃期的な良書である。これを加賀の吉田直心(長淑)が訳した。即ち「泰西熱病論」玉函夫古撒謨著、文化一一年(著者蔵)である。その第一巻冒頭に「医は自然良知の臣僕なりと、善哉此言実に医家の大則なり」とし、さらに、「熱病は纖維の強弱を診する事一大緊要の事なり」とある。自然良能といい、纖維といい、ライデン学派の医学思想の根幹である。又自序にも「以纖維之強弱弛張与血液之多少炸崩、為察熱之圭泉也」とし、その熱病の分類も思想もブルルハーヴェの「治準」の「哥全質」論によっている。即ち、第一巻第二丁裏以下に「普児イメルハイ黒冥理学ノ明哲ナリ、凡ソ疾病ヲ察スルニ独リ纖維ノ強弱ニ因テ論ス……」として纖維学説の主要を述べ、その三丁表にはシデナム(前述)の“genius epidemicus”の思想をも採り入れ、また五丁裏には歌ヘイスチル以私的児の愾衝熱と熱との考え方を記している。

## ⑤ アルトルフ及ヘルムステット学派

ここで追記すべきは、ハイステル(前出)をライデン学統のドイツ、アルトルフ及ヘルムステット学派とした点である。ハイステルがわが外科学の初期に与えた影響は偉大であり、ハイステル像が今日尚、ヒポクラテス像に匹敵する程、多く残っている点でも明らかである。ハイステルの代表作“*Institutiones chirurgicae*”, Amsterdam 一七三九年版(著者蔵)の第一巻に挙げられた *Bibliotheca Chirurgica* の中に現れた一一九九部の多数の文献の中にブルルハーヴェの文献が一部も挙げられていない。(但しハイステルの“*Compendium anatomicum*”, 1748 にはブルルハーヴェからの引用は非帯に多い)。又、ハイステルを訳した「瘍医新書」卷之一(大槻玄沢訳)の「外科誘導」(著者蔵)には詳細な外科史も含まれて



因動脈末梢為閉塞而發焉、今時諸家則日動脈末梢為潤大也」としてブルハーヴェの「閉塞説」を全面的に採っていない。これはライデン学統といえども、時代の流れが、かくしたものと思われる。

前述のゴルテルにしても、新宮涼庭の訳した「窮理外科則」（前出、宗田）本の巻之一、第三章、論單纖維には、ブルハーヴェの極微思想をそのまま享けて「測家天元ノ一ヲ設ケテ一点ヨリ二点を生シ、累々点々相逐テ累トナリ一線ヲ生シ、又線ヨリ線ヲ合セテ面ヲ生シ来ルト論ズ」とし、「元質元実ノ一元ヲ設ケテ極微一点ヨリ二点ヲ生シ、点々相累ナリ綴リテ連球ノ如ク、極微ノ一單纖維ヲ生」として「治準」そのままの思想を述べている。しかし、その第二章、論纖維には、「此單纖維ハ眼力顕微鏡ヲ以テ極メ視ルベシ、其質、許多至細ノ纖維、錯綜叢束シテ成ノミナラズ、視力極メ難キ至微ノ小管モ夥シク聚リテ成ル者ナリ、人或ハ此小管ヲ指シテ纖維ト認ムル事アリ」とし、やや断定を避けているし、新しく纖維を八種以上に分類して五体組成の纖維説を著しく近代化している。

#### ④ ライデン学派の機械論とハラール学説

以上、要するにライデン学統は臨床学に於てヒポクラテス→シデナム→ブルハーヴェと、自然哲学の思想を批判しつつ採っているが、理論的には、むしろ著しくデカルト的な機械論である。従って有名な「人間機械論」（岩波文庫、参照）の *de La machine* がブルハーヴェとも関係があつたのである。嘉永元年一八四八「窮理外科則」最終巻が出て、約一世紀の長期間わが蘭学に行れたライデン学統は生氣論に取って代えられる時代となる。

ただ、ここに重要なことは近代生理学の創始者であり、ブルハーヴェの高足である Albrecht von Haller (法児列爾)、一七〇八一七七である。この訳書は一つも行れていないが、次に述べる生氣論時代の訳書には必ず出でくる人名である。そして、その *Sensibiliaet* と *Iriabiliaet* とは多くわが国に紹介されている。思想的にはデカルト的でありながら、デカルト医学の限界を超えた実験による事実認定の厳密さに於て、さらに深度を示した。従って、この形態的なものを超克した理論は生氣論者の多く支持するところとなった。このように *regionär* なものに、当時の哲学が加わって、生



気論という特異な医学説が起るのである。

## 第二期——生氣論医学移入時代

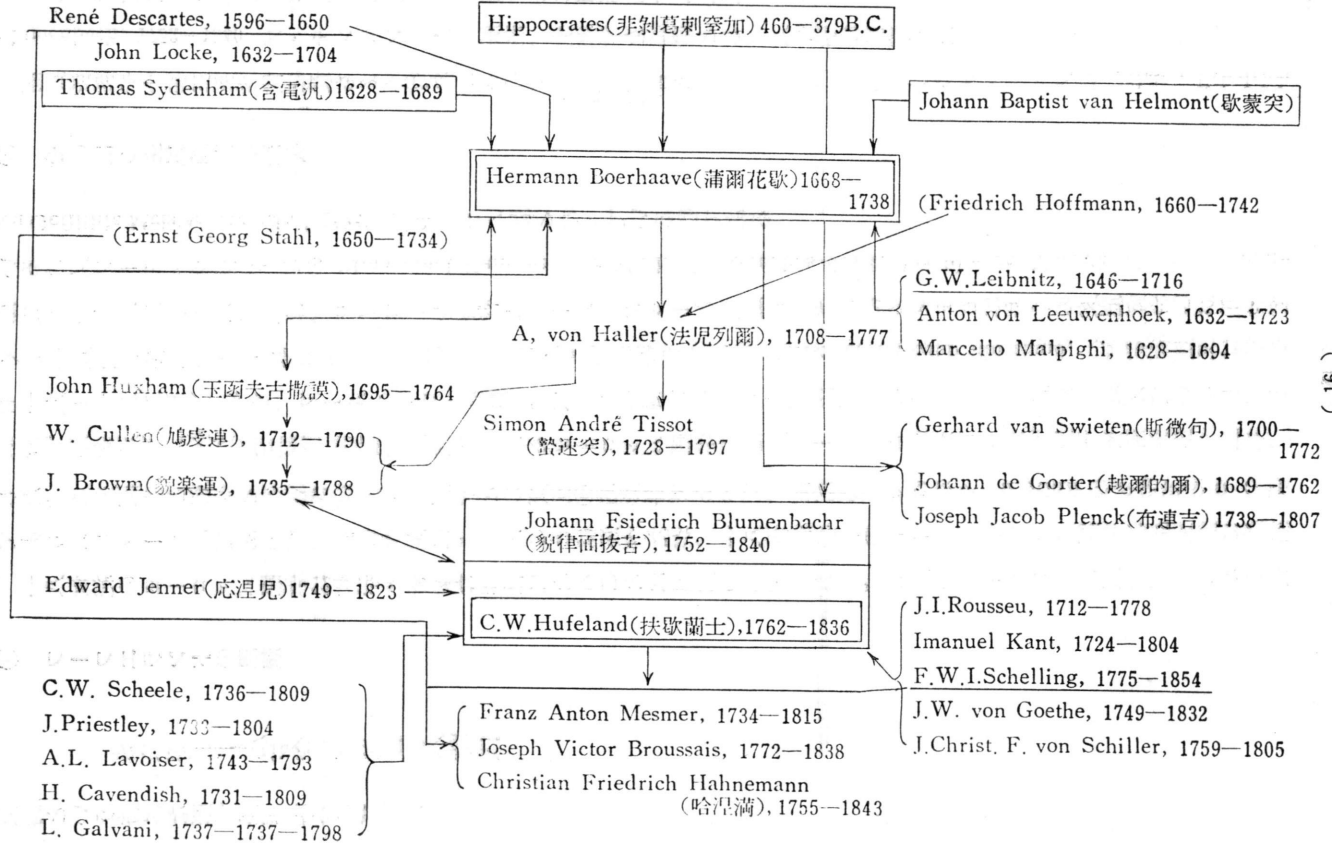
### ④ フーフエランドの思想

一八世紀のヨーロッパ医学は哲学と密接な関係にあることは衆知の事実である。前述のライデン学派医学がデカルト的でありスピノーザ的であって、織維学説によったことは述べたが、一八世紀後半のドイツ、オランダ医学は生氣論に終始した。この医学と哲学との関係は哲学と医学との交互⑤的影響であって、飽迄偽装ではなく、a priori のものである（「原病論」序参照）。（阿知波五郎「細菌学成立にいたるヨーロッパ医学の構成——蘭学資料から見た」医学史研究第一二号、七一—七二二頁）。即ち、ブールハーヴェに於ては、その自伝において、医学修得前に哲学の課程を終えているし、とくに一八世紀後半の生氣論者で、わが蘭学医学に大きい影響を与えた Christoph Wilhelm Hufeland、（扶歌蘭度又は扶歌郎突）一七六二—一八三六は、ワイマール時代にゲーテ、シラーと交遊し、さらにカントとは多くの文通資料④が残っている。又フーフエランド篇の「Immanuel Kant, von der Macht des Gemüths durch den blossen Vorsatz seiner krankhaften Gefühle Meister zur sein」, 1824 はレクラム版となっている程である。

### ⑤ その他の生氣論医学訳書

高野長英や小関三英時代に最もよく行れたものは貌律面拔苦イウク、メン、バツクと昆私コンシである。即ちブリウメンバックは Johann Friedrich Blumenbach, 1752—1840 ゲ・チンゲンの人、解剖、生理学を基礎とし、人類学に傾倒した巨人であり、ドイツ生氣論者の雄である。故板沢武雄教授の「輸入蘭書目録稿」には四部（一八二五年及一八三五）が載っている。その中には学位論文の「De generis humani varietate nativa」も入っている。高野長英訳「医原枢要」内編五冊（長英全集）天保三年（一八三二）は Abbildungen

蘭学訳書ニ現レタ18世紀ヨーロッパ医学思想関係表 (表第四)



naturhistorischer Gegenstand” (一八一五年輸入)、即ち原著は“Handbuch der Naturgeschichte” 1779 からである。昆私は Georg Wilhelm Christoph Consrbruch, 1764—1837 で最近大阪の古書展で、(1)の昆私貌觚画像を見た程であるから、當時は余程名の知れた存在であったのであろう。即ち「昆私貌觚凡例」卷一—七、青地林宗重訳、昆私貌觚著蘭、墨扁訳、写本 (富士川本)、をばじめ「昆私内科治論」上編第一—三、(五冊) 下編第一—八、(七冊) (著者蔵) 及び「泰西内科集成」卷一—三(三冊) 工私貌兒觚著蘭、墨扁訳、訳者不明 (著者蔵)、は何れも円容は扶氏と同じ生気論者である。これらは墨扁訳であるから、Geneskundige Handboek voor Praktische Artsen, 1824—27 (door N.C.Meppen)、どあつて、原著には“Taschenbuch der Pathologischen für Aerzte und Wunddaerzte, 1820” “Allgemeine Encyklopaedie für praktische Aerzte und Wunddaerzte” の十八巻がある。それから蘭訳したものであろう。即ち“Handboek der algemene Ziektekunne” (door F. van der Breggen)”や“Handboek der ziektekundige Ontleedkunde” (東北大、大槻本) である。これは G.J.Pool の蘭訳である。これが後者の蘭訳本であって、小関三英や青地林宗の諸訳本の原著は前者ではなからうか。ともかく、コンスは Cullen (鳩虞連)(キユイ) の、あの有名な“materia medica”, 1790 を訳し、Brows (貌栗運) の機械論を攻撃している。その他、高野長英の「病学編」三九七—五九三頁 や「原病發微」(同全集) はコンスの前者によるところが多い。さらに帆足万里の「窮理通」も亦リーセランドと共に、このコンスの前者からの引用が多い。

当時、Theodor Georg August Roose, 1771—1803 は拉設ラセトもしくは羅設ローセトとして、よく行れたことは知れている。「人身窮理小解」備中、緒方章公裁重訳 (著者蔵) には原著ホークトキツ、ローゼ著、和蘭、エイフマ訳註とある。この蘭書(写本、著者蔵)には明らかに T.G.A. Roose とあつて蘭訳者は M.S.Ypma である。又、先年故、安田竜夫教授所蔵の同名蘭書、即ち“Handboek der Natuurkunde van den Mensch”, の和刻とアムステルダム版を見たことがあり、その原著者は T.G.A. Roose である。蘭訳者は M.S.Ypma である(2)の)から August を写本しつつある間にホークトキツとなったのである。即ち著者蔵のローゼも Loose と誤写やれつゝある。T.G.A. Roose は一七九七年に“Grundzuge der Lehre von der Lebenskraft”の著がある。これが原著であろう。何れにしても「人身窮理小解」には「第一章」に「生活力」の章があつて、全

般は明らかに生気論の立場から述べられている。

公刺地<sup>コウサツチ</sup> Johan Wilhelm Heinrich Conradi, 1780—1861 に至っては当時の進歩的なドイツの病理学者 Johann Lucas Schönlain, 1793—1864 に真向から反対した生気論者である。

又、当時の蘭書(写本、著者蔵)の中に斯字<sup>スプレングル</sup>李傑兒<sup>スプレングル</sup>(察別<sup>スプレングル</sup>理然兒)と両様に書いた四冊本がある。タイトル、ページ欠損せるため不明なるも、和訳文字を拾えば「処療大法」であり、原著者は Curt Sprengel 蘭訳者は G.J. Pool と記してある。当時の歴史学者として有名な Kurt Polykarp Joachim Sprengel, 1776—1833 である。ローゼ、Roose の「人身窮理小解」の原著「Grundzüge」;(前記)を、このスプレングルは高く評価したという。従って、このスプレングルも生気論時代の人である。

ただ、ここに触れたことは伊東玄朴(冲齋)の訳した昆斯骨夫<sup>ビスコフ</sup>の「医療正始」卷一—二四三冊本(別に五冊本、八冊本あり)蘭訳 越而実幾 伊東玄朴重訳(著者蔵)である。ビスコフは前記「輸入書籍目稿」には Biscof(Bisko)“Geneskunde van langdeuring ziekten”;(輸入一八三七年及一八三九年)とある。(池田哲郎教授によれば見在蘭書が発見されないということである)。その原著は“Grundsätze der praktischen Heilkunde” 3Bände, 1823—25 であろうと思われる。即ち昆斯骨夫とは Ignaz Rudolph Bischoff, 1784—1856 で、その伝記を調査するに、一七九一—一七九二年までオランダ、イギリスに渡り、次で一八〇六年にパリに遊んでゐる。すでに旧ウィン学派を離脱したウィンの有名な die medizinisch-chirurgische Josephs Akademie (ヨセフス・アカデミー)については後述)に招かれている。van Eldik (越而実幾)によつて前記原著が蘭訳されている (Cornelis van Eldik, 1791—1857 この人は多くのドイツ医学書を蘭訳した医人であり、当時の蘭学者達にも広くその名を知られている。(このような経歴が示すように「医療正始」の医学内容は著しく、他の当時の生気論医書内容と相違する。従つて、一般生気論医学の範疇に入れ難い。

生気論医学の移入時代には、原著の移入と、その訳書出現の間隔が短く、従つて、その移入期間は Hesmman Lebert (列蘭爾篤) 一八一三—一八三四の坪井芳洲訳「医療新書」歐爾滿列蘭爾篤原撰、紀元一八六一年原本、三〇卷(著者蔵)の出現 坪井(訥)芳洲重訳、慶応二年一八六六年

以来、生気論系訳書は跡を絶つ。このように短期間ではあるが、しかし、これらの生気論医学は明治初年頃まで一般に繁用された。⑤

### ◎ 生気論の医学思想

生気論医学中、最も行れたものは前記フーフェランドの訳書（一三種刊行）である。よってフーフェランドを重点として、その医学思想を調べて見た。

前述のようにフーフェランドは生気論者ではあるが、その多くの訳書を通じて観察しても、当時の物理、化学の新発見を撰取した折衷論者であるので、その医学論は生気論という概念から得られるような思弁的なものばかりではない。有名な Makrobiotik<sup>1)</sup>、1796 の重訳である辻恕介訳の「長生法」<sup>一冊（富士川本）慶応三年（一八六七）</sup>に現れた思想は多分にルソウ的である。この本の内容は一七九三年ワイマールの金曜会の席上、ゲーテやシラーを前にして講演したもので、これが機縁で一八〇〇年ベルリン大学に招かれた。そして、フーフェランドの「ヒポクラテスへの回帰」思想の最初の現れである。フーフェランドの医学論ともいふべき「Pathologie」は一七九六年の刊行で、晩年の作「Enchiridion medicum」1836（長門「谷洋治氏蔵」緒方洪庵訳「扶氏経験遺訓」<sup>計二五冊 安政四年（一八五七）</sup>（著者蔵）の原著）に現れた思想とはかなりの距りはあるが、「Pathologie」の訳、「原病論」<sup>C.H. Brink 蘭訳 石川遠重訳二冊</sup>において徹底した John Brown（貌葉運）・一七三五一—一七八八攻撃にみちている。ブラウンがライデン学統から出たエヂンバラ学派の William Cullen（鳩虞連）・一七二二—一七九〇の刺戟説（前述のハラー法児列爾の影響が大きい）から出ながら、徹底した機械論にはしたので扶氏は「原病論」に「プロウニヤン流」の自然良能否定を反駁している。これは生気論者として当然のことである。「原病論」の自序の中に「生力ヲ顧り見スシテ、生体ニ死体アル所ノ分合力アリト思フ者、其ノ誤、猶分合力ノ形勢ハ器械力ノ形勢ニ因テ説クガ如シ」といい、さらに「是ノ如ク誤ルモノ其ノ説ク所ノ分合力ヲ尤モ精確ナリトスルトキハ、生体亦他ノ死体ト同シク死分合力アリトスルナリ。然ルトキハ、是レ豈ニ治療ノ目的トナスベキモノ唯生体ヲ以テ論スルニ在リ」としている。ブラウンの

興奮性と刺戟との關係を重大視し、刺戟に依じて興奮すること、生物の特質と考えた。フーフェランドは「固形部共患アルトキハ諸力亦害ヲ受ケザルヲ得ズ。諸力已ニ病アルトキハ諸液ノ混合性質變易セザルヲ得ス。乃チ其ノ變性ノ諸液又一種ノ刺戟物トシテ固形部ヲ衝動ス」。だから諸液質の病患は生力に基くが、それには諸液質に因を發する筈である。然るに「ブラウニヤーン流」は生力のみをもって論を立ててはいるが、諸液を全く眼中においてなく、その単なる「生力」というものの単一な力に起因するという機械論には反対だとする。生氣論の根幹はこのように、ブラウンなどの機械論反駁に終始しているが、ブラウンが使った *Sterile* とか *ashterie* とかの哲学用語は、そのまま、「扶歇蘭土神經熱論」坪井 信道 (著者蔵) に挙げてゐる。又「濟生三方」扶歇蘭土著上、中、下三冊、文久元年(一八六一) (著者蔵) の巻中の三丁表には阿片の刺戟劑としての効用を説き、「彼ノ貌樂運ノ医流、行ハルル間、吾輩屢々衷ムベキノ諸症ヲ目撃」した旨を記載し、彼の医史上有名な「ナポレオンが戦争で殺した人間の数よりも、ブラウンが殺した患者の数の方が多い」事実を暗示し、さらに「当今ハ古人貌樂運流ノ害アルヲ懼ルルヨリ、遂ニ阿片ノ効用ヲ遺忘スルニ至レリ。故ニ予今此ニコレヲ辨明シ、阿片ヲシテ其本分ノ声価ヲ得セシムト欲スルナリ」とフーフェランドの温健な折衷的態度を示している。しかし、生氣論、殊にフーフェランドはブラウンの反動とも見られる文章が各巻にみとめられる。

然らばフーフェランドの生力とは何か。「原病論」の「語解」の部にレーヘンス、カラクト(生活力)を解して、「生活力トハ是レ原素ニアラス。即チ生活スル所ノ現候ナリ」と説きおこし、「生活スル者ノミ刺衝」があると、これに感觸して生活現候を現す。この「カラクト」を当時の算家使ったXで現している。たとえば「思量ハ是レ現候ニシテ、量思セシムルモノヲ思量力ト謂フ」これがXだとしている。この生活力には「畜ニ刺衝トノ保合ヲ含ムノミナラズ、又分合力トノ保合ヲ含ム」として昔、ヘルモントが *Archais* (亞爾加欧斯) 説の中で、この「カト称スルモノヲシール精神ト云ヘリ」として、大体シールという表現はこの場合には当たらないとしている。シールは思量力のみ表現であるが、生氣論者は「思量ト生活」の二物を併立して含まねばならないとし、レーヘンスカラクトの名を興えている。これはカント的である。即ちレーヘンス、カラクト(生活力)は、「畜感受スル所ノ勢ヲ含ムノミナラズ、又諸液ノ混合及ビ諸物質ヲ造成

シ、生活体ニ於テ一種異ナル所ノ分合機ヲナスコトヲ含メリ」としている。これはシェーリング Friedrich Wilhelm Schelling, 1775—1854 の思想をもうけて、生活力という力をもつ生命体は一つの合目的性を持っていて、当時発見された諸々の新発見事実をも含めた分合力や化威力を持っている。その生活力が自らを生産し、全体自身が部分の相互作用においてのみ作用する。そして、これを刺戟するもの「刺衝」がおこり、これを感じ、そして生活作用が起る。その例として「血液ハ心臟動脈ニ於ケル甚ダシキ一箇ノ刺戟物ナリ。肝ハ胆汁ヲ製スル者ナリ。故ニ胆汁ハ肝ノ一大刺戟物ナリ。」と、其他、尿は腎の刺戟物、この点は同じシェーリングの影響を受けた Samuel Hahnemann (吟涅満) 一七五五—一八四三の Homöopathie (忽没越阿巴智) の "Similia Similibus" (類似療法) と同じでもある。このようにフーフェランド医学は機能の主であって、その「原病論」には形態学的のものが無い。即ち、自然哲学派以来の所謂、生理学的医学に哲学の加つたものであって、飽迄人間という巨視的觀察が主である。従つて、同時代のフランスの進歩学派のビシャの局処病理観は全くない。勿論、前記フーフェランドのカントの "Macht des Gemüths" を註解したフーフェランドの本の自序の中にはビシャと同じ病理解剖を主としたフランスのピネルの名が現れる(同書五、八)。総じて、刺戟とそれに感応する対抗力との記載に終始している。従つて、臨床での態度は飽迄、ヒポクラテス以来の自然良能を堅持している。この点ではヒポクラテス→シデナム→ブルーハーヴェー→フーフェランドと全一八世紀一貫している。従つて蘭学時代にヒポクラテス像が多く散在した。これは、それ以後の訳書には余り現れなくなる。又、この思想的傾向からシデナムの *genus epidemicus* のように、伝染病を素質的に求める考え方は、「神経熱」や「済生三方」などに見られる。しかし、瘡が刺衝(刺戟)に感応の結果生じるものとし、伝染病中大気中にある感染沫を有するとしてたり、非常に連歩的な記事がある(「原病論」及び「扶歌蘭士、神経熱」)。このように生氣論は刺戟に対する感応を重視するからハラ(法児列爾)(前出)の紹介が随所に見られる(「済生三方」巻之中二丁裏及び「原病論」乾等)。一般に生氣論はスタール(前出、系統学派)の Animismus から出ているが、「原病論」には「スタール及び、エンゲルス人、精神ヲ以テ生活ノ原トス、非ナリ」として批判している。即ち、これから見ても単なる生氣論者ではない。

以上のように、当時の原病学は前述したように生理学的医学論であることは緒方洪庵の「病学通論」題言に詳述してある。この哲学と医学との交互交流はフーフェランドの訳書「原病論」(前出)中に有名な哲人カント Immanuel Kant、1724—1804の名が現れることによって、その一端をうかがうことが出来る。西周の論文に韓図の名が現れる。西周全集、三三三頁)、これは明治六年(癸酉)、一八七三年であるから、フーフェランドの訳書にカントの名が現れるのは、その約二十年前のことである。このように古くカントの名がわが国に紹介されたことは、その思想を理解したか否かは別として重要な事実である。勿論、フーフェランドの訳書中には、主観と客観を併立して考える—それは前述の生活力の定義一つにしても、多くのカントの影響がある。しかし、むしろ、医学的には、精神病の治療法において「精神ハ固ヨリ無形ナリ。何ゾ疾病ニ罹ルコトヲ得ン」又「精神ノ本然ハ形質有ルコト無く、亦形質ヨリ生ジタル者ニ非ス」とし、無形治法をあげ、第一法として「患者ノ智慧ヲ明カナラシメルヲ以テ自ら其預愚ヲ剋スルニ至ラシムルニ在リ」とし、啓蒙療法と、さらに道徳療法を強調している(「扶氏経験遺訓」第八卷第六編)。この点がむしろ具体的なカントの影響⑥と見るべきである。(前出の Ebslein : arzte Bstief. ss. 68—72 及び、前出の Hufeland : Immanuel Kant. 参照)。こうしたカントの主観と客観併立の思想は、さらにシェーリングの影響を受けて、物心の上に、これに勝るもの、即ち生活力を置き、死体でない生体の有機的関連性を全人的統一において観察する(「扶氏遠西医鑑病機編」卷之一参照)。

前記緒方洪庵の「病学通論」も「泰西疫論」新宮涼庭訳 三冊  
文政七年序文(一八二四)(著者蔵)も、共にこれら生気論者の本を綜合して成ったものであり、近代医学が多分に一八世紀後半医学と関連性があることを憶えば、短期間ではあるが、この生気論医学時代は重要な史的意義が含まれている。

#### ④ 「利撰蘭度、人身窮理書」の意義

とくに、ここに付け加えなければならないことは、当時ヨーロッパにおいて連歩的な病理解剖を主体にしたフランス学派医学である。その意味において広瀬元恭訳「利撰蘭度、人身窮理書」三卷  
安政二年(一八五五)(著者三木栄氏蔵)である



Anthelme-Balthasar Richerand はパリの有名な外科医であり、その「人身窮理書」の原著は『Nouveaux éléménte de Physiologie』1801 (フランスでは一三版以上、さらにベルギーで一七版、イギリスで七版、ドイツ、イタリアで二版、その他オランダ、スペイン、ロシア等各国語に翻訳された。Balthasar Richerand のこの本は、この意味から重要である。養浩堂長柄為質撰の序に「西洋窮理之学、近代以越列機多兒等説天地間万有之理矣」これは當時の L. Galvani, 1737—1798 や Franz Anton Mesmer, 1734—1815 のことを指し、やうに、一般生気論者の説を云うのである。しかし「利撰蘭度氏之見、独不然、蓋人身内景之妙機、非独越列機之所能容也」といい、現代の病理解剖といかないまでも、人体の形質ののからの医学論をさし、これを当時の日本人が理解しての序文である。これは当時のわが医学界には全く劃期的な言である。そして、同書卷二の一六丁表には「毘加咄(人名)人身諸器ノ元質(織理)ヲ論説シテ二一元ト為ス。其説最モ佳ナリト雖モ亦繁冗ニシテ謬誤シ易シ。夫レ表皮ノ織理毛髮織理モ共ニ同質ニシテ、且ツ其成分モ亦異ナル事ナシ。其資養モ同フシテ諸骨軟骨粘液膜鹹液膜膜關節膜皮等ノ維理ノ元モ皆同一蜂窩質ニ出ツ。是故ニ一々仔細ニ区分シテ其数ヲ挙ルハ冗多ナリト云ヘシ。然レトモ毘加咄既ニ能ク此幾般ノ織理ヲ區別シテ始テ其綱領ニ立テ以テ人ノ眼目ヲシテ一新セシム。故ニ其著ス所ノ解剖通書盛ニ世ニ行レテ大ニ声名ヲ得ルモ豈虚誉ナランヤ。然レトモ其書中、前哲後賢ノ説ヲ取用セサルカ故ニ往々人ノ指摘ヲ免レス。若シ其駁雜ヲ沙汰シ長短ヲ取捨シテ能ク其華ヲ拔ハ則必ズ声価ヲ損スルニ至ラサリシヲ惜哉」これはピシヤの紹介、概説である。又リーセランドをも引用した「病学通論」卷之一、二〇丁表には「毘加多ハ生機感ナ感受ト収縮トノ両機ニ出ル者ニシテ唯顕潛ノ別有ルノミト云フ」とある。何れにしてもピシヤの一八〇一年に刊行された『anatomia generale』の組織思想である。ピシヤが近代医学の創始者の一人であり、その局処病理観は、一般医史学者のひとしく、高く評価しているところである。病理解剖学(細胞思想を基礎とする)の前衛である臨床病理学—それは肉眼的病理解剖学であるが、生理学的医学の旧いからを脱して、「織理」という表現で、形態学的のもの、即ち細胞思想を述べている。以下二一元の記載がある。これは、フランス医学の要点を紹介したものである。リーセランドの医学論は、生力を覚力(知覚力)と効力(収縮力)の二力とし、この生力によって機生体の作用を説く。そして当時の舎密家の

五一元をあげ、機生体の化学的構成の元素とし、とくに「活物ノ原ハ膠質蛋白質纖維質」とする。これらが「機器ノ状ヲ具テ而シテ漸ク活性ノ織理トナル」(同書卷二、一七丁)さらに凝質に及んで、機器系統の目となる。この系には一〇系が  
あって、その「結構ハ織理アリテ以テ之ヲ形成ス」そして、その織理を四質に分けて、これが「身体形器ノ原質トナル」  
(同書一八一九丁)。従って、これらの諸器が「不測ノ妙用ヲ逞シ更ニ交々齊一ニ其機ヲ活潑スルモノ」であるとする(同  
書、二二三丁裏)。つまり、その生力の説明は、従来の生気論に化学的な構成と形態的構成を加えて、著しく近代化したも  
のである。書中(同書卷一、二三四丁に)蒲児哈歌、林那烏斯、法児列爾以下の従来の医学論を紹介、批判している。法児  
列爾の批判は卷之三にも二カ所出ている(一三三丁、一七丁裏)。さらに「ブラウン」(ブラウン)を痛烈に批判し、その誤  
を指摘している(卷之三、三八丁裏)。これを要するに、すべての点で、さらに従来の生気論を越えた、近代化を認める。  
その意味から、本書の出現はわが国へ生気論と近代医学とのつながりを物語らしめ、医史学的に大きい意義のあるものと  
認める。

### 第三期 病理解剖を基盤とし、細胞思想確立の時代

生気論に沈退していたドイツ医学は Johannes Müller 1801—1858 によって一変するのである。大ミユラーの学統には  
Schwann, Henle, Gerlach, Schulze, Koelliker, Virchow, Helmholtz, Du Bois-Reymond, Brücke, Pflüger, Bidder らの各方  
面の碩学が陸続輩出し、その盛大さは近代医学推連に大きい力を与えた。

Hermann Lebert (前出) は坪井芳洲の「医療新書」(前出)において様式を一変して、疾病の第一項に必らず病理解剖  
所見を述べ、明らかに「細胞」(卷之三、四八丁)の文字を認める(慶応二年、一八六六)、この本は当時ヨーロッパで  
繁用された有名な「Handbuch d. prakt. Medizin」2Bd, 1865 の重訳である。同年に出た島村鼎甫の「生理発蒙」一四卷(著者  
慶応二年(一  
八六六)には組織論の一章が書かれ「細胞体」(セル)の文字が現れる。これは、オランダの Liback の訳書である。さ  
らに当時 Diefenbach と共にドイツ外科学界を風靡した Georg Friedrich Louis Stromeyer, (斯篤魯默兒)一八〇四—一八七

六の著（“Handbuch d. Chirurgie”）の訳本、「外科医法」佐藤尚中重訳一冊慶応元年（一八六五）はミューレル（前述）による六種類の細胞学上の癌の記載（総論第四篇）があり、其他炎症等すべて組織学的所見を以て述べられてある。即ちレベルトを境として、俄然従来の医学論は放擲され、全く形態的になってくる。さらに明治に入って、五年に新宮涼閣の蘭訳からの重訳で成った Felix Niemyer, (仁墨兒) 一八二〇—一八七一の「内科則」初編（第一、二）二冊、明治五年（一八七二）（著者蔵）と同年出版された Ferdinand Kunze, (措設)、一八二六—一八八九の「内科簡明」林洞海重訳卷一—三、一五冊（著者蔵）（“Compend. d. prakt. Medizin”, 1863）には病屍解剖所見を附し、前者の第二卷三七丁表にはロキタンスキの紹介、後者の中には「寒暖計」「聴器」の記載もある。そして翌明治四年に出た石黒忠恵「外科説約」（著者蔵）の卷之一、五丁表にはウイルショウ Virchow 及びヘンレ Hanle（何れもミューラー学派として前出）の名が現れる。

以下、洋学としてアメリカの Austin Flint や Henry Hartsorn 又 Heinrich の英米独の医書（著者蔵）が訳され、殊にフライ（普徠）は初めて組織学のみを講じたものである。細胞病理学に関しては緒方富雄教授によって「ボンベと細胞病理学」が発表されてあるので、詳細は触れない。

### その他の医学思想

以上で、わが蘭学医学思想系譜を述べた。ここに附記しなければならぬのは、「瘍医新書」序目、卷一—三、四冊文政八年（一八二五） 独、老楞佐、協乙速的盧著、大規玄沢、桂川甫賢参関 の卷之一（第二冊目）の二二丁から二〇丁に亘る外科史の翻訳である。これは、ただに外科のみに限らずヨーロッパ医学思想の発展経過にふれ、克明に人名を挙げている。これによって、蘭学に与えた医学思想理解度が増したと見ねばならない。

第二は、フーフェランドの「医戒」杉田成卿訳、一冊 嘉永二年（一八四九）（著者蔵）である。扶氏医戒は幕末医界には広く行われた。ヨーロッパ医学倫理は、義務観念を主題として説いている。わが医学倫理を説く上において、はじめて、儒教的な仁以外に、近代的な医学思想をもったものとして医学思想上重要である。ヨーロッパの一七世紀は開業医の黄金時代でもあったの

で、たとえばモリエールの戯曲の中には医学の不信や、医者への嘲弄が数多く見られる（「飛び医者」、「ドン・ジュアン」、「恋の医者」・「嫌々ながら医者にされ」、「ブルルソーニヤック氏」、「氣で病む男」など）。こうした医師の尊大と、人間の弱点を握る医師への反撥は一八世紀にも続くのである。そういう社会の風潮を反省したのが、この扶氏「医戒」である。この思想は医者相互に切磋して人格を高め、医学研究の場としての医師会や学会結成の気運となって現れる。フリント（前出）の有名な Austin Flint：“medical ethics and etiquette”，1883（著者蔵）などによって逐次近代的な医学倫理が確立するが、扶氏「医戒」の意義は扶氏が生気論者であり、哲学との関連があるが故に特殊といわねばならない。

#### 引用文献

- ① 大槻如電「新撰洋学年表」
- ② 創元社「デカルト選集」及び Descartes の“OEUVRES ET LETTRES”，André Bridoux 1953 参照
- ③ 阿知波五郎「細菌学成立にいたる医学の構成—蘭学資料から見た」医学史研究第十二号、（七一—九一七二頁）参照
- ④ Erich Ebslein：ärztliche Bstiefe, 1920. ss. 68—72.
- ⑤ 山口県三田尻、華浦医学学校、蔵書目録参照
- ⑥ 前掲 Ebslein 著 ss. 68—72 及び Hufeland：Immanuel Kant 参照
- ⑦ 緒方富雄「蘭学のごころ」一七四頁
- ⑧ 阿知波五郎「医学倫理」、九大医報、第三三卷、第六号、五四頁

# 杉田玄白述『犬解嘲』について

片 桐 一 男

## 目 次

- (一) 杉田玄白の著訳書とその伝存
- (二) 杉田玄白と河口信順
- (三) 覆刻『犬解嘲』
- (四) 『犬解嘲』の内容
- (五) 『犬解嘲』をめぐって

### (一) 杉田玄白の著訳書とその伝存

杉田玄白の著訳書としてこれまでに、われわれは二十三部を知っている。そのうち明治初年までに木版で刊行されたものとしては『解体約図』『解体新書』『和蘭医事問答』『養生七不可』『鶴亀之夢』『形影夜話』と『蘭学事始』の七部を数えることができる。また未刊本で明治以後現在までに活版に覆刻されたものは『後見草』『野叟独語』『鬻齋日録』と『蘭学事始』の四部に過ぎず、他の大部分は写本

として伝存している。そのうち穂亭主人の編になる『西洋学家訳述書目』に記されている『外科備考』『天真楼漫筆』と『天真楼雜稿』の三点は目下その所在が不明である。そして所在のはっきりしている二十部については、その所在および略解題が石原明博士によって日本医学雑誌第八卷第三・四号合併の杉田玄白一四〇年忌記念特集号誌上で試みられ、紹介されていて便利である<sup>1)</sup>。内容のわかっているこの二十種を玄白の著訳年代から整理してみると彼の遺墨・尺牘・関連資料などと共に彼の思想の変化およびその間の玄白の人間性も窺えてすこぶる興味深いものがある。ここで紹介する杉田玄白の口述に係る『犬解嘲』なる作品は、右にいう二十三部には含まれておらず、この度の紹介が初めてのことかと思われる。後でも触れるように、この『犬解嘲』は玄白の晩年の部類に含まれる作品で、伝来の筋もよく、内容もすこぶる興味深く思われるので全文を紹介

介し、若干の検討を加えてみたいと思う。

## (二) 杉田玄白と河口信順

この『犬解嘲』は、茨城県古河市の河口家に伝来した史料で、昭和三十八年秋に河口家から東洋文庫に納ったコレクション中の一点である。

そこで河口家と杉田玄白との関係を説明せねばならぬかと思う。河口家は代々土井侯に仕え、初代河口房頼(了閑)は本姓野田氏(河口良庵よりカスバル流外科の免許皆伝をうけ、天和元年(一六八一)土井利益公に召出され、姓も河口と改めた。第二代目河口房重の宝暦十三年(一七六三)には土井侯が肥前唐津より古河に移封となるに及び、扈從古河に入り、以来代々古河に住居しておる。第三代河口信任は宝暦年間栗崎道意より和蘭外科の免許皆伝をうけ、次いで明和七年(一七七〇)自ら京都で行った解剖実験によりその記録『解屍編』を編し、同九年三月に刊行した。この挙が日本における人体解剖史のうえで、宝暦四年(一七五四)山脇東洋の解剖等若干の先例はあったが、明和八年三月杉田玄白らの小塚原の解剖に先だち、自らの執刀で行われ、その記録が正確なことから高く評価されていること

で著明である。第四代河口信且に次いで第五代河口信順は幼名を熊之助、壯也、裕卿、陶齋と号し、文化九年(一八一二)十二月十七日表御医師として十五人扶持を給せられ、土井利厚公に仕えたのであったが、時に信順二十歳の若さであったため、なお良師について医術修行方を藩に申し出、「(前略)江戸表浜町ニ外宅仕罷在候酒井讚岐守様御医師杉田玄白老与申仁江隨身仕、当夏も沓ヶ(年)之間御同人方江寄宿仕修行仕度奉存候、依之何卒以 御慈悲往来之外沓ヶ年之御暇被下置候者重疊難有仕合奉存候(後略)」と江戸日本橋浜町河岸山伏井戸に住む杉田玄白の天真楼塾への入門を藩に願ひ出たのであった。この願ひが何時許可となったか、確証はないが、『吉田方函』<sup>(8)</sup>と題する写本一冊があり、その大尾に「于時文化十二乙亥歳冬十月余遊学于京都於天真楼塾中深夜写之 河口信順」と記されており、また『春林軒膏藥方』<sup>(4)</sup>と題する写本一冊の裏表紙見返しには「于時文化十三丙子歳冬十月写于天真楼塾中 河口信順藏書」とある。すると結局河口信順の天真楼塾への入門修業願ひは許可され、少くとも文化十二年十月から翌十三年十月までの一ケ年間に在塾していたことは動かないところである。この間、教授を受ける一方、夜間余暇を見出ししては

せつせと写本に励んだことが窺われる。もっともこの文化十二、十三年の頃といえは、杉田家においては、すでに玄白が家督を養子伯元に譲って隠居（文化四年）してから七年たっており、後妻いよの長子立卿も別に眼科医として一家を立てて（文化元年一八〇四）からすでに十四年を経ておるのであって、玄白自身は蘭学、診療に明け暮れる毎日から漸く遠のき、子孫・門下生・知友らのために過ぎし日の蘭学興隆の跡をふりかえって回顧録（のちの『蘭東事始』）を物し、その校訂方を大槻玄沢に依頼もし、現在の老境を吐露して『耄耋独語』一篇をまとめた年にも当っている。

このように天真楼塾において直接蘭学教授に当るのは養子にして家督を継いだ伯元先生であっても、玄白自身はなお「杉田老先生」と呼ばれ、折に触れ何かと指導に当ることもあったかと思われる。

ここに紹介する『犬解嘲』は、その末尾に「此書岡村某藏之余借而写焉于時文化十三丙子歳二月中旬也 河口信順」とあって玄白の最晩年に河口信順の天真楼在塾中に写本されていたものである。また「杉田老先生述也」と明記しており、内容からも玄白の口述に間違いはない。

### (三) 覆刻『犬解嘲』

凡例

- 一、変体仮名は平仮名に改めた。
- 二、句読点は適当に附してみた。
- 三、鬺字は原文通り一字あき、平出は二字空きに処理した。
- 四、其の他一切を原文に忠実なるを旨とした。

### 犬 解 嘲

或一人の親友来て曰、此頃陪臣の医者三四輩、公儀之御目見被仰付候由何ら手柄の図なり、夫に付、其輩打しりて咄合を聞ば、我ら今度 御目見え被仰付るゝ事誠以冥加至極此上となき仕合なり、其已前の事は不知、近き頃陪臣にて 御目見申上候は牧野公御医師柴田玄德と貴兄斗なり、古き事は知らず珍らしき事なり、尤是迄町医にて 御目見え被仰付候は数々あり、其分御目見相済と直に五節句朔望登城御願 御目見へ申上候也、其故に供廻りも官医同前に召連来るなり、然に玄德は生付近目ゆへ遠慮して不願、玄白は何の故に而不願哉先格を破り我儘成しなり不埒なる男と甚以嘲り合へり、貴兄何故に而不被願哉所存承度と申たり、老拙答つ、預御尋赤面之至なり、元より不才無術の老

拙多年病用致出精のよし被及 上にて御沙汰、先達而

御目見へ被仰付事甚以冥加に相叶候事世の誉と言ひ、対先祖候而も此上もなき仕合骨身に徹し難有奉存候御事なり、然は如何様其他の例に従ひ可申事は勿論なり、何そ私了の了簡を加へ一簡を可立事にあらず、老拙より前方柴田玄徳方

御目見江被 御付候得共朔望の御礼不相願、其訳を承は

陪臣の身にて对上登 城仕度と相願候事は恐多奉存候由、己に諸大名の家督之節其家々の家老共 御目見江申上候得

共其日切にて重而朔望の御礼に不罷出、陪臣に而は主人くゝの家の法に従が礼と申、夫ゆへ其所は不願よしなり、是

が則近例故任其例が道理と心得誠に其訳柄も尤の様に存せしゆへに老拙は登城不相願候、全我儘よりの事にあらず、其

上近来老衰し乍慮外小水は頻数なり、御殿中広大の御場所に而寒氣強き早朝など万々一不調法に而も有之時は恐入た

る御事と存せしゆへ近例あるを幸の事と存し旁以老拙は御願不申上、若又召連る供人の常に少こと不審し是を如何と

被申なは是には微く意のある事なり、其事聴置可給、是迄町医の身ならば 御目見江申上しを規模にして供廻り多くつ

れましきものにもあらず、夫は何ゆへなれば、元来町医と云うものは帯刀もあらず小者と一人の外は不被連身分なり、

其正扱は 御目見可被仰付御達有之日まては其趣にて出る

事なり、御目見済ての後は浪人武士の格に成事故若党も連

られ帯刀もする事なり、町医の内は諸事町奉行の支配なれ

と右相済て後は其手を離れ諸事御目付より達を請る也、然

はとて 御目見以上と云ふにあらず陪臣家老と同格と云ふ

様成ものなり、夫ゆへ御役を勤られたる家に而は其事委く

知り給へるゆへ其屋敷へ出入するとき開門はせさる也、先

年曲淵甲斐守殿御町奉行在役の刻、町医の 御目見へ医者

開門せさるを立服し兎や角と争しか終に其理り難尽なき寝

入りになり果たり、其砌不案内の諸大名諸旗本方に而大門

江駕乗懸れば開門するゆへ不及挨拶如官医出入するは無礼

至極大法を不知人とこそ申へし、扱又陪臣に而御目見被仰

付し医師の分は元より武家の家来なり、兼而より如官医人

数召連に無遠慮格なり、不被連人を連るにはあらず其身の

持前と云ふものなれば規模にはあらざる事也、又人数少し

連れあるくは格にあたらすと云うことにもあらず、己に小

普請の御医師御薬方御医師の往来にても分れたることなり、

常に人数を揃へ給ふにもあらず、御目見へ已上正しき官医

にてさへしかり、まして陪臣にて御目見の済たればとて連

ねはすまぬと云ふ理はなきはつなり、勝手次第の事なるへ



し、惣して供と云うものは其身の備へに連れるものなれば其人の好によるべき事なり、元備へのためにする人なれば途中にて喧嘩口論にてもある時、其主人の命にも代るほどの人ならては連れたりとて用には立す、其時に臨み逃隠るゝ様成もの何人連たりとて無益ことなり、当世の風俗にて皆渡り者宿<sup>無カ</sup>者斗にてわづかの給金にて一年切に奉公するものなれば何ぞの時逃かくるゝは知れたことなり、左様の人を取集め無益にめしつるゝは何の意にや、畢竟は外見名聞のためと云ふものなり、是は刀のぬくすへもしらす大小を刺の類ひにて、お多福か似たり櫛笄をさしつらね顔にも似合ぬ美服を着ていやみして歩行の如く志ある人に見らるゝははつかしきことにあらつや、然はとて自身に下駄傘を持あるかるものにもあらず、只外江行くに事の弁する様に其日のもやう次第に連へき事也、只々無分別の渡者や日庸の類を飾斗につれあるき、万一途中に而喧嘩口論を仕出し主人の名を穢し、公儀江懸御世話候様なることありては面目もなき事なるへし、人数多ければ人氣も不揃製<sup>不揃</sup>止も不届もの也、然はなるたけ遠慮し小勢に召連れるが宜方と老拙は存也、但し老拙 御目見申上候後はケ様くくに相心得よと誰差図はなけれども遊所芝居等は武家の立入ま

しき場所のやうに承り、一度 上の御沙汰に預り 御目見も申上候身なれば、左様の場所へ立入万一何そことありては不慎の分と存し其後は右の場所杯へは足踏はせず、忍ひてはくるしからすなど申人あれども左様のいやしきことは嫌なれば参りしことはなし、其外は 御目見への後も其已前と同じ意にて今日迄は到り来りし也、世にいふ名聞かざりにかゝわらす余り見苦しきと云ふ人ありとも夫は恥にも思わす、本来医者と云ふものは出家沙門の類ゆへ公儀の御条目にも綾白無垢は三位已上、但し儒医は可為製<sup>可為</sup>外とありて無官にて白無垢着ても御咎めも無之身分なり、是は身分のよきにはあらず、畢竟製<sup>可為</sup>外ゆへなればなり、さるにより官位被仰付候儘になし僧官の法橋法眼に被任るゝことなり、然者傍人のことゝ余りきみかみ可申事とは思はれず、唐にても世々の史に、方伎伝に書加へられ縉紳の例には載らず、然は志ある人のなすへき業あらすと云ふとも佳なるへし、然とも不為将相は為良医と云ふ語もあれば、将相となりて民の寒苦を救ふも同じ仁術なれば、他の業には勝ると思へは左のみ可恥ことにもあるへからず、老拙医者<sup>老拙</sup>の家に生れし身なれば、人を救ふを目当にするより外に志す所はなし、世の外見の拙きは恥と思す、業の拙なりとい

はれんことをは恥と思ひて深く心を勞することなり、別に身の樂を好む我儘云ふにはあらず、若重て此度の御目見へ醫師達拙老か我儘にて先格をくずゝなど云はるゝは迷惑至極なり、此旨能々申しひらきて嘲を解給れかし、尤人間と云ふもの 各好所のあるものなれば人々の好所に従ふか宜かるへし、此度御目見申上候醫師達朔望登城被致たき望あらは其事の不被願身分にはあらず、被願か宜しかるへし、不叶事にはあるへからず、勝手次第の事なり、他人にかゝわらは無気量と云ふ事なりと申せしかば、友人聞てあら口の功者のわろなり木挽屑も云へはいはるゝものなりと咲てこそは別にけり

此書岡村某藏之余借而写焉于時文化十三丙子歳二月中旬也

杉田老先生述也

河口信順

#### (四) 『犬解嘲』の内容

本文を読んでまずいいうることは、確かに玄白自身の口述になるものであるということ。すなわち、「近き頃陪臣にて御目見申上候は牧野公御医師柴田玄徳と貴兄斗なり」

とあって、御目見が済めば大抵の者は五節句ならびに朔望の登城を願うのに、この二人はその願ひ出をしない。もつとも柴田玄徳は生れつきの近眼であつて不自由な身体であるから遠慮するのも当然かと思われるが「玄白（中略）貴兄何故に而不被願哉所存承度」と親友から問ひ詰められて、「老拙」つまり玄白の答えるという文の形式からして明らかである。また最後に別筆ながら「杉田老先生述也」とあるのは杉田玄白先生の口述に係るものと読みとつて差支えない。

話の内容は、世間の人達から、嘲り、噂されている玄白の二つの行い、すなわち、御目見の済んだ後にも世間並に五節句・朔望の登城を願ひ出ることをしないこと、および常々召連れる供人の少いことの二つであつて、この二点をめぐつて嘲りを喧しくする世人に対して玄白が彼独特の論法をもつて所信を披瀝しているのである。

さて、ここで確認しておかなければならないことが幾つかある。

まず、「近き頃陪臣に而御目見申上候は牧野公御医師柴田玄徳と貴兄斗なり、古き事は知らず珍らしき事なり」とあつて随分珍しい例のようであるが、この点は如何であ

ろうか。「御目見」がすむと「御目見医師」となるわけであ  
って、この御目見医師とはその術に堪え優れた町医師陪  
臣医師が新規に御目見を仰せ付けられ、召抱られた場合に  
かく呼ばれるのであって、更に修業次第では御番医師にも  
昇進できたのであった。杉田玄白が將軍家齊に御目見を濟  
ませたのは文化二年（一八〇五）七月二十八日玄白七三歳  
の時であって、解体新書出版からすでに三十一年を経てお  
り、その間多忙な診療の余暇をぬって著作活動も『狂医之  
言』『的里垂加纂稿』『後見草』『養生七不可』『形影夜話』  
等の多きを物しておるのであって、ちょうどこの年は『玉  
味噌』の出来た年にも当たっている。またこの前年の文化元年  
には露使レザノフが長崎に來り、とんで文化三年には露人  
のエトロフ占拠のこともあって玄白自身天下のことに思う  
ところあり、やがてそれは『野叟独語』としてまとめられ  
たわけであるが、身はすでに老境に入っても、心には緊張  
を來たしていた時期に当たっていたようである。話題は異つ  
てもこの『犬解嘲』にも気なお軒昂なところが窺えるの  
である。同じく御目見を許された牧野公御医師柴田玄徳と  
は如何なる人物であろうか。この伝が実はさっぱりわから  
ない。ただ、文恭院殿御実紀卷寛政十年（一七九八）六月

朔日の条に「大坂城代牧野備前守忠精家医柴田玄徳某。市  
井医目黒道琢某ともに謁見を給ふ」と、わずかに見えてい  
るだけである。後考をまちたい。

ところで、玄白に向けられた第一の問題、何故御目見の  
後にも五節句・朔望登城を願はないのか、という点に対す  
る玄白の見解は、何も自分一人の了簡を差し加え破格のこ  
とをしているわけではなく、柴田玄徳の前例もあり、ま  
た、そもそも陪臣の身で上に対し登城を願う事は恐れ多い  
ことと思われ、かつ諸大名の家督の節その家の家老達が御  
目見を申上げるけれど、この家老達さえその日一回切のこ  
とであるから自分は登城を願わない。そして、それが道理  
と思うというのである。かつ身体の具合も漸く老衰の兆候  
を來たし、殊に「乍慮外小水は頻数なり、御殿中広大の御  
場所に而寒氣強き早朝など万々一不調法に而も有之時は恐  
入たる御事と存せしゆへ」登城は遠慮したのであった。生  
來病身な玄白にとって気の進まなかったであろうことはう  
なずける。なお、時は降って文化十三年（一八一六）玄白  
最晩年の『毫耄独語』にも「小水は（中略）老の身は年毎  
に頻数になるもの故夜もひるも数ししく、殊に冬は西北の  
風立肌寒き日は通して後も又忽に聚るやうに余瀝たへす、

清水の滴るやうの心地して意安からず、其不浄不潔なる事何にたとへん心持もあらず、わけて貴人の座に列る時はいかなる尾籠仕出さんかと心中安からず、是等人の知らざる苦しみなり」と同じような記事がみえることから、このよ  
うな不自由な状態は十年前の文化二年七十三の頃からすでに続いていたことかと、偲ばれてならない。

さて、第二の問題は、他に比して玄白が召連れる供人の常に少いこと、について世人は兎角不審に思っている。しかし、この点について玄白には意見があるというのである。

町医者であった者が御目見得を済ませたというのであれば、それを格式にして供廻りを多く連れ歩くという気持はわかる。そのわけは、町医者である間は江戸府内の行政（民政）を掌る江戸町奉行の支配を受けるのであって、勿論帯刀は許されず、外出時には小者と他に一人の外は連れて歩くわけにはいかないのである。御目見を許されれば、士分の格式を与えられるわけで、その支配も町奉行の手を離れ、目付の支配下に入るのである。また帯刀も許され、外出時には若党も連れ歩くことができるのである。しかし、これとても、御目見以上というわけではなく、陪臣家老と同格なのである。だから、諸大名・諸旗本がこのような医

師を往珍に呼んだとしても開門して迎えるというようなこととはしないのである。ところが曲淵甲斐守町奉行在役の頃、このことを知らない町医の御目見医者が開門しないのを立腹して兎や角争ったことがあったが結局言い分は通らなかつた。それというのも制度を知らない諸大名・旗本連が町医の御目見医者呼んだ時にも開門して迎え入れ、その医者の方でも官医同然挨拶なしで出入するというようなことが行われていたからであるが、これは大法を知らず、無礼なことである。ところで陪臣で御目見を許された医師は元来武家の家来なのであるから供廻りを連れて歩くのに何ら遠慮すべきことではない。またその供人数の多い少いは特別格式ということでもないのである。それよりも御目見以上の官医である小普請医師や、御薬方御医師でさえも供廻りの人数を揃えるというようなことはしていないのであるから、まして陪臣で御目見を済ましたからとて供廻りを連れ歩かなければならないということはない。それに供というものはもともとその身の警固のために連れ歩くものであって、途中喧嘩口論でもあった時には、主人の命にも代るような人間でなくては用に立たないものである。ところが当世は皆渡り者のような無分別者を一年契約で抱え供

に連れ歩くのであるから、何か事ある時には逃げ隠れてしまふであろうことは知れたことである。結局世間では外見名聞のためにのみ連れ歩くのであって、それでは万一の時に主人の名を穢し、公儀へ御世話をかけることになってしまい、面目もないことである。それに人数が多くなれば気心も一致しにくくなり、しっくりいかない。だから実際の用を便ずるに足るだけの小人数にしておくのがよいと思うのである。とされている。

このように玄白には御目見後もそれ以前と殊更に変えるべきこととてなかつたのであるが、ただ心掛けたこととしては、遊所・芝居等武士の立入りまじき所へは行かないようにし、これも世間では忍びて通うなら苦しからざるものと云われていたが、このようなことは玄白の氣にくわぬことのようにであった。また服装も、公儀御条目には綾白無垢は三位已上、但し儒医は制外たるべしとあるから無官でも白無垢を着て差支えないわけであるが、これも身分が高いという意味ではなく、例外の扱いという程の意であるから強いて常に着用しなければならぬということではない。まして世人が兎や角といふべき筋合ではないのである。このことは唐でも医師は方伎（四）に載せてあり、縉紳（五）の部門に

は入れていないのであるからよりはつきりわかることと思われる。結局のところ将相たらざれば良医たりという語もあるから、医の仁術たるべきことをわきまえ斯業に専心すべきものである、とされている。だからして、外見の拙きことなどは恥ではなく、医術の拙いといわれることを最も恥と心得るべきなのである。まして玄白が我儘をして先格を破っているなどいわれるのは迷惑至極である。よろしくそのような嘲は解消して欲しい。もっとも今度御目見を済ませた医師達は朔望登城致したい希望があるならば願ひ出ることのできない身分でもなく、当然できる身分の人たちなのだから好む所にしたがい勝手にしたらいいと思われる。それを他人の言動を気にしているようではいかにも無器量という外ない。と云えば、友人はこれを聞いて、荒口の功者のわろなり、木挽屑も云えばいはれるものだ。と笑って別れた。

冗長に亘ったが、杉田玄白述『犬解嘲』はざっと以上のような内容である。

(五) 『犬解嘲』をめぐる

さて、『犬解嘲』を一読したあとで気付くことが一つ二

つある。簡単に列記して参考に供したい。

まず『犬解嘲』なる表題をめぐって考えられることは、この表題は本文の最後の部分に「此旨能々申しひらきて嘲を解給れかし」とあるところから付けられたものであろうが、不可解なのは何故犬が嘲を解くというのであろうか、愚見を披瀝すれば、犬はよくいわれる犬馬の犬とでも意を採れば玄白の心が推し測れるかと思う。すなわち「犬馬」とは「人臣対君自卑之辭」とされているから、「犬解嘲」の場合も「何事につけ至らない私（玄白）ごとき者ではあります、よろしくそのような嘲は解消していただきたい」という程の意味になるかと思われる。これが表面上の意味であって、その裏に、「このような至らない者にさえも説き伏せられ、簡単に言い返されてしまうような諸君はいかにも無器量者、不甲斐ないものということになるではないか」といったような玄白の気持が隠されているのである。見識のない世人・同業の者に対してよほど気に障るところがあったとみえ、かく痛烈な批判となったのである。このように考えてみると内容と表題がびつたりする。

なおここで想起されるのは、『野叟独語』である。玄白の作品『野叟独語』は、御目見を許された文化二年から更

に二年後の文化四年（一八〇七）七五歳の年、家督を養子伯元に譲り隠居した年の作であって「形影夜話」と同じ趣向で、影法師と自分との問答に托して当時の世相ならびに政治に批判をなし、更に外交政策に対しても積極的手段をもって当るべきことを論じた作品である。題も「田舎爺の独り言」というような謙遜した表現を用いているが、文中、太平に馴れ柔弱と化した旗本や奢侈に耽溺している諸大名に対して、痛烈な批判もなされているような諸点から筐底に秘められてはいたが、玄白の政治に対する関心及び見識が窺えてすこぶる興味深いものがある。その一節に『犬解嘲』の中で当世の風俗では供廻りに、渡り者やわずかの給金で一年切に抱え、役にもたない者を外見名聞だけで連れ歩いているというくだりとよく似た箇所がある。すなわち、旗本・大名は「太平の化に染み次第」に奢に長く世間の付合外見のみを宗として（中略）僅の御番勤に一ト番切に日雇を買ひ人足を雇ひ人数の頭数を合を漸勤の者を欠ぬ斗也、其勘しきは江戸内の勤登城にも徒士鎗持まで一日雇として間を合する方々もありと也、惣て士を学ひ華美の風俗に習ふ人情にして倍臣までも分外の奢に長し今は都下の時風に成下りし故其の国に武の風義は絶果て皆当用の便

利なる渡りものを一年切の若党小ものに召仕ふもの斗也、依之是また何事そといふ時はいつも差支供に立へきもの、有へからず」という具合で、誠によく似た一節である。『犬解嘲』といい、『野叟独語』といい、その記述の言葉の端々に似通った点もあり、また題の付け方も共に捻った心が窺える。してみると、積年多忙な診療および翻訳活動の間に感じ止めていた事々を、伯元に家督を譲ったあと漸く筆に上らせるだけの余暇を見出し、また考えをまとめる心境に至った頃かと思われる。

以上のような事情から、このような文体で『犬解嘲』をまとめた時期について、玄白自身は何も語ってはいないが、それでは次に玄白によって「此度 御目見申上候医師達朔望登城被致たき望あらは其事の不被願身分にはあらず、被願か宜しかるへし」とて、論破された人達、すなわち玄白を嘲った人達は、ではどんな人達であろうか。その人達は、その事柄の内容からして、最大限を限って玄白が御目見を許された文化二年（一八〇五）七月から没する文化十四年（一八一七）四月までの一二年間に御目見を許された医師達であろう。御目見許可の人名を書き留めておいた控など見当たらない今日、仮に徳川実紀より拾ってみると、

文化二、七、二八、酒井修理大夫忠貫家医杉田玄白、町医加藤宗玄、西良仲、

文化六、七、二八 松平安芸守齋賢医土生玄碩某、松平金之助容

衆医池田玄瑞某、松平備後守利之医山本玄潭某、土井甲斐守利義医雨森宗真某、

文化八、四、二八 松平豊後守齋興家医河村宗澹、市井医中山専

真、宇山隆卓、印牧玄礦、武藤三益、

文化八、一二、一 松平政千代家(伊達)医大槻玄沢、市井医大沢

宗隆、

文化一一、四、一 松平越後守医宇田川玄真、

と、玄白をのぞいて一四人を数えることができる。このうち陪臣にして御目見を許されたもの七人、町医より御目見を許されたもの七名であるが、このうちの誰々がそのような噂をたてたのかわかるよしもない。右の一四人中には漢方医に混って蘭方医も含まれており、御目見後晴がましく登城願いたいという希望を心に持っていても長老玄白がその願をしないので、彼等は日頃抑えていた心を、つい口に出すこともあって、拡まったのではないかとも考えられる。しかし、この点は確証を得ているわけではなく、あくまでも筆者の推測の域を出ない。

では最後に、玄白がこのような文体で『犬解嘲』をまとめたのは何時のことであろうか。玄白自身は何も語っていない。しかし、玄白の周囲の事情を考えた場合、御目見も済み、家督を伯元に譲ってから後二年めの文化四年にいたり、日頃心にいだいていたことを一篇にまとめて『野叟独語』と題して社会・政治に批判をなしたこと。『犬解嘲』においてもその文体・論法に共通した点のままみられることからして『野叟独語』をまとめた頃からそう遠く距ることとは思われない。かつ玄白の御目見後その没するまでの間に御目見を許された人達の人數・顔ぶれ、その許された年を考慮に入れた場合なお一層そのように受けとれる。玄白の他の作品との比較、友人門弟等との交渉を示す書翰類などによっても謗証をあげたいところであるが、一切は他日に譲って小論では玄白の作品『犬解嘲』の紹介とその内容の検討にとどめ一先ず筆を擱くことにする。

註

- (1) 日本医学雑誌 第八卷第三・四号(昭和三十三年一月十五日) 杉田玄白一四〇年忌記念特集号

- (2) 古河市 河口信広氏所蔵文書、全文は拙稿「河口家と杉田玄白」(蘭学資料研究会研究報告第一六五号 一九六四・一二

・一九)所収

- (3) 東洋文庫所蔵河口家旧蔵史料に含まれている。

- (4) 同右

- (5) 杉田家由緒書、徳川実紀

- (6) 徳川実紀

- (7) 市医目黒道琢某と杉田玄白は相識の間であったと思われる。

杉田玄白の日記『鶯齋日録』には玄白が数多くの集会に出席した記録が載せてある。そのうちでも「病論会」と呼ばれる医学上の研究会が定期的開催されており、会場は會員の自宅を順番に廻っていたらしく、会日は原則的に毎月八日の夜、のちには毎月十一日の夜に開催していたことがわかる。このメンバーに目黒道琢も加っており、天明七・一・一六 今晚目黒道琢方会席上談。天明八・一・一八 夜目黒亭会。寛政元・閏六・八 目黒亭病論会。寛政二・一・二・八 夜道琢会。とあって、目黒道琢は四回にわたって会場を自宅に引受けていることがわかるのである。また当然玄白宅へも来たことであろう。

- (8) 『耄耋独語』、一卷、未刊写本、文化十三年(一八一六)春著、玄白八十四歳の作。一種の回想録体の自叙伝、慶応



(9) 医学部図書館に『玉味噲』と合綴され、ただ一部が存する。曲淵甲斐守景漸が江戸町奉行として在役していたのは明和六年（一七六九）から天明七年（一七八七）にかけてであり、常盤橋内の北町奉行を勤めた。また『蘭学事始』によれば明和八年三日三日夜、千住骨ヶ原にて明日腑分する旨を玄白らに手紙で通知してくれたのは実にこの曲淵甲斐守

(10) の家士得能万兵衛でもあった。  
唐書卷二百四、方技列伝一百二十九には「凡推歩卜相医巧皆技也」とある。  
後漢書 列伝 八十卷。第十二卷に朱景王杜馬劉傳堅馬の伝論に「遂使縉紳道塞、賢能蔽壅、縉赤色也、紳帶也、或作摺摺、摺也、謂摺笏於帶也、」とあって仕宦のことを縉紳といったのである。

### 寄贈図書紹介

Vademecum-XIX. Internationaler Kongress für Geschichte der Medizin (S.Karger A.G. Basel, 1964)

一九六四年九月七日より十二日の間スウイスのバーゼルで開催された第十九回国際医史学会の会誌 Vademecum が今回発行された、世界各国より集まった医史学者が夫人を伴って開いた会議の次第が報告されていて、世界の医史学の現状を知るにもって来いのものであると考える。一七六頁に及ぶ本誌の内、講演抄録はその九三頁より一七三頁までに載せられている、講演者は全部で一五六人、そのなかの一七八番目には日本の大矢全節博士の名が見えている、演題は大別して六部に分かれたれ、第一はヴェザリウスとその関係年代のもの、第二は古代医学、第三は中世の医学、第四は治療史、第五はスウイス地方の医学、第五は

精神病学史、第六は雑という部類になっている。講演は英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語等の各国語で行なわれている。今回の学会の会長は地元バーゼルの H. Buss 教授が勤めているが、国際医史学会長であるフランスの Wickersheimer をはじめとしてチューリッヒ大学の医史学教授の E. H. Acherkneht, Tübingen の W. von Brun-Inneの N. H. Kswani, ギリシヤの Oeconomos, 等の錚々たる医史学者を集めてのこの学会はさだめて聴きものであったにちがいない。それだけにこの学会の講演抄録集である ademecum は医史学研究者にとって好読物であるばかりでなく、世界の医学史の現況を知るにはこの上ないものと考ええる。

(大鳥蘭三郎)

# 『童子経』と『救療経』にみられる鬼神について

杉 田 暉 道

『仏説護諸童子陀羅尼経』（略して童子経という）は西紀四世紀頃に成立したと考えられ、密教系の經典としては初期に属するものである。経名の示す如く神咒の力をもって小児の疾病を治す秘法を説き、発病の原因として十五大鬼神の名を挙げている。しかしこれらの鬼神は種々の動物の形をなしており、これが小児についた時に現わす症状についても詳しく述べている。漢訳は南北朝の五百年頃菩提流支によって行なわれた。

密教ではこの経文がかなり重んぜられて、この経文によって行ずる修法として「童子経法」若しくは、「十五童子法」があり、『覚禪抄』や『凶像抄』の中には本尊の周圍に十五鬼神の図を画いている。

『救療小児疾病経』（略して救療経という）は「ラボラ」が説いたもので、その起首に「ラバナ」が世の中の小児を

みわたすと、生まれてから十二歳になるまでは精神が幼稚で十分に発達していない。それで十二の曜母鬼が昼夜を分たず遊行していて、小児が眠っている時とか、一人で坐っている時に現われて、種々の形をなす、この為小児はびっくりして精気を奪われて病気になるのである。自分はこの母鬼とその症状について説き、かつこれを治す方法を教えようと述べている。

すなわち、第一母鬼は、誕生日、出生月または出生年に毒手をふるい、小児は発熱し、体がやせ、心もかくらん状態となり、体は常にふるえて食物をとらない。かくして第十二母鬼は出生後十二日目、十二カ月目または十二年目の小児をおかし、種々の病状を起こさせるのである。これらの母鬼のとりつきから離れる方法は、母鬼が欲する祭祀を行ない、陀羅尼 dharami を唱えるのである。その修法は夷

に不思議なもので、魚肉、生熟肉、酒等を供える他に、野狐、猫児、殺羊等の糞、人骨、蛇皮などを焼いて、香薫となすべきことを説いて、その病的な特色を大いに發揮している。渡辺海旭先生の研究によると、『童子経』と『救療経』にみられる鬼神の根元は、古代印度の大史詩『マハバラタ』の中の神話にあると述べ、さらに『童子経』の鬼神と『救療経』の母鬼の異同を比較し、後者の母鬼のうち、六人の母鬼が童子経のそれと一致していることを確認し、『救療経』の方が『童子経』より後代のものであると結んでいる（壺月全集上巻）

ともかく、この二つの経典は小児の疾病の原因として鬼神をあげているわけである。

仏教が栄えた時代の古代印度の科学的学説では、物質の元素を四つに分類している。一には地大 Pṛthivi で堅い性質を持っている。二には水大 Ab で潤う性質を持っている。三には、火大 Jalo で暖い性質を持っている。四には、風大 Vayu で動揺する性質を持っている。この地水火風の四元素が寄り集まって、物質が出来上るとするのが四大説である。

したがってこの四大すなわち四つの元素がうまく調和す

れば、無病息災であるが、そのバランスがくずれると病氣にかかる。その種類は、地水火風の四大に各々百老種類の病氣があるから、合計すると四百四種類の病氣となる。この説が多くくの仏典にみられる疾病の原因論である。（維摩経、増一阿含経、摩訶僧祇律）

当時の印度医学はかなり分科され、進歩していたことは、『金光明最勝王経』の除病品においてもみることができる。すなわち、「復応知八術 総撰諸医方 於此若明閑 可療衆生病 謂針刺・傷破 身疾弁鬼神 惡毒及孩童 延年・増氣力」とある。ここで針刺とは、目、鼻、耳等頸以上にある疾病を針で刺して治療すること、傷破とは、外来の害物を防ぎ、また炎症、腫瘍、膿腫等を治療する療法であり、身疾は内科的疾患をいうのである。鬼神とは精神病をさし、惡毒とは阿伽陀による消毒で、梵語の阿伽陀は解毒剤のことである。孩童は小児科をさすが、当時は母親及び乳母の病氣をも含めて治療した。延年とは長生法を意味し、増氣力は、生殖力を増し、或は快足して足を保護する方法を講ずる術をいうのである。このような八種類の分科は、吠陀以来の印度医学の伝統であって、仏教もこれを踏襲したのである。

さて、この八術の中の鬼神とは、精神病を示すことは、先に述べたが、そのような病気は鬼神が人類に執魅するから起こるのであるから、精神病を治療するためには鬼神に對する治療法を先ず考ねばならぬとして、精神病のところを鬼神としたものと考えられる。この考えは古代より存在するもので、いわゆる万有靈活論と呼ばれるものである。すなわち、我々の周囲にある一切のものを靈化し、すべてのものに我々人間と同じように精神があるという考え方は、精神作用の尚お幼稚な国民にあらわれるもので、容易に魔力の存在を信ずるものである。このような考え方が、疾病および災難など人間に苦痛を与えるものについて、その原因を鬼神や悪魔の所為に帰するようになるのである。特に精神作用の不完全な小児の疾病や、精神病等の原因に鬼神を帰することは当然のことと思われる。このように考えてくると、八術の中で鬼神と孩童は別立しているが、實際は密接な関係があるということがわかるであろう。そしてさらに興味あることは、疾病の原因は地水火風の四大の不調によるものであるというようなかかなり哲学的な考え方の中に、古代からの素朴な鬼神によっても病気にかかるという思想が根強くはびこっているという事実で、このような矛盾

盾は文明の進歩した現代においても存する。

ところでこのような小児の疾病を治療する經典が、何故に密教系にのみ存するのであろうか。筆者が調べた範囲ではこれ程詳細に小児の疾病について述べている經典は見当らない。けれど密教においては、教義よりも加持祈禱の行儀の方を重んじ、根本の仏を大日如来 Mahāvairocana と呼んだ。しかし従前の仏教は釈尊の説いたものであるが、密教は大日如来の所説であるとしたり。また従来の大乗仏教とは異なるといので、みずから金剛乘 Vajrayana と称した。秘密の教団であることを標榜し、閉鎖的であり、特有の複雑な礼儀を發達せしめた。諸仏諸尊のみならず、従来に仏教では説かなかつた多数の明王、仏教外の諸神、諸聖者もやはり大日如来の現われであると解し、多くの民間信仰を摂取し、その趣意を直觀的に表するために、大曼荼羅を構成する。(童子經によって行なう「童子經法」の修行の時に、本尊と十五鬼神を安置して曼荼羅を構成する) 従来の大乗仏教のように六波羅蜜(智恵・布施・持戒・忍辱・精神・禪定)の實踐に不断的の努力をなす必要はない。衆生は本来仏性を具えているのであるから、諸尊を念じ、陀羅尼を誦し、密教の特別な儀式にあづかることによって容易に

究竟の境地に達し、仏となることができるという（即身成仏）。したがって現世の幸福快樂を承認する。人間の煩惱情欲は克服抑圧さるべきでなく、尊重さるべきである。不純な愛欲を一切衆生に対する慈悲にまで高めればよいと考えた。かくして童子経や救療経などが小児の無病息災・安全の加持祈禱のために重要視されるに至ったと考えられる。

また中国における天台宗の開祖智顛（五三一—五七九）によって書かれた『修習止観坐禅法要鈔』の下巻の「治病卷九」に鬼神によっておこる病氣というものがあげられている。『修習止観坐禅法要抄』は一名小止観ともいわれ、智顛が兄陳鍼の為に大部止観の梗概、入道の枢機を記したものである。わが国には奈色朝に伝来しているが、伝教大師、最澄によっても将来されている。

さて、小止観の「治病卷九」には疾病の種類として、四大不調による病氣、五臓の病氣、鬼病、魔病および業病をあげている。

この中の鬼病とは、鬼が四大（地、水、火、風）五臓（心臓、肝臓、脾臓、肺臓、腎臓）に入ると起こるものである。併し鬼は漫りに人を病ましめない。人が邪念を起こ

したり、吉凶を知ろうと欲したりすると、鬼が種々に変化して五根より入るのである。そしてこの鬼病を治さないと人を殺してしまうようなことになる、と述べている。さらに魔病について説いている。これは心を病ますもので、丁度鬼病と対立するものである。鬼病は身体を病ますものである、と説かれている。

この小止観に述べられている疾病の種類の中には今まで述べてきたものとなり異なっているものがあり、鬼病にしても、八術にみられる鬼病とは、その概念が相当異なっていると考えられる。小止観の作者智顛がこれらの疾病の種類を独自に考えたものか、仏典にみられる疾病の種類に、古代より存する中国のある種の疾病を適当にとり入れたものであるか等については、今後さらに検討を加えたいと考えている。

鬼神によって小児が病氣にかかる、または精神病にかかるといふような思想は、わが国においても古代から存しており、このことは病魔或は疚鬼などと言葉が古くから使われていた事実からみて明らかである。『童子経』や『救療経』に述べられていることが、この思想とよく一致した為に、民間ではよい治療法として、これらの經典がかなり用

いられたのではなからうか。してみると、いわゆる民間医学の中にこれを証明するものが、相当あるのではないかと出来るだけ調査を行なった。が、意に反してはっきりと証明出来るものは見出せなかった。しかしして関係ありと考える二、三の例をあげれば、

「鬼の念仏」……平安朝の時代に創作された悪魔で、これによって疾病を予防出来ると考えられた。大津絵の鬼の念仏が小児の夜泣を止め、悪病を払うと考えられたのもこの一例である。

「麻鶏羅鬼」……鎌倉時代、梶原性全が著わした医書、『万安方』の中に瘡病を起こす原因としてこの鬼が挙げられ、その図が掲げている。

「鬼」の文字を渦巻に腫物の上に書いて、その文字の靈妙不可思議な力によって腫物を治そうというまじないである。(治療学雑誌七卷、七、八、九、十、十二号、八卷、

一号)

# 『庶物類纂』の成立と伝本

福井保

成 立

『庶物類纂』の編修は江戸前期の本草学者稻生若水によって始められた。若水、名は宣義、字は彰信。明暦二年（一六五五）江戸に生れた。父は恒軒と号し、儒医を以て宮津侯永井尚征に仕えた。若水は十一才のとき大阪に赴いて医学を古林見宜に受け、また伊藤仁齋に経義を学んだ。延宝八年（一六八〇）永井氏が封を除かれたので、若水も浪人となって京都に住んだ。若くして本草学に一家を成し、ことに名物学に精しかった。

元禄六年（一六九三）金沢に来遊し、松雲公前田綱紀に仕え、翌七年から八年にかけて『食物伝信纂』<sup>(一)</sup>十二巻を編述して同公に献呈した。本草・物産学に造詣の深かった松雲公は、これを見てその博識に感じ、元禄十年（一六七

九）三月、庶物類纂の編修を若水に命じた。若水にもまた同様の素志があった。すなわち、かつて『皇明経世文編』を読んだところ、日本には薬物が乏しく、すべて中国に頼る旨の記事があったので、本草学を修めて国産を興し、輸入を防ぎ、またその方面の大著述を完成して名声を海外にまで輝かそうと志した。そのためには封域が広く、物産豊富な加賀藩に仕えるのが最適と判断し、あえて松雲公に仕官を求めたと伝えられている。この両者の希望が一致したことが本書成立のために非常な好条件であった。

若水は、編集資料としての唐本の収集、筆耕の雇入れ、筆紙の給与、植物の実験的栽培などについて松雲公に依頼すると共に、京都に居住して編修につとめ、元禄十二年四月には早くも鱗・介・羽の三属十七冊を脱稿、献上した。これより連年、草稿の成るごとに進献し、公はこれを検閲

して遺漏を補い、疑義を正さしめ、また金品を贈って慰勞した。

やがて正徳五年（一七一五）七月、若水は京都に病没した。<sup>(二)</sup>編修は中途であつて、草・木・果・味・花・鱗・介・羽・毛の九属、合せて三百六十二卷、一千百八十余种を完成したばかりであつた。はじめ若水は二十六属一千巻を編修目標として定めていたから、これはまだ半途にも及ばなかつた。松雲はこれを惜しみ、若水の門人である藩医内山覚仲らに命じて遺稿を統修せしめた。やがて享保九年（一七二四）松雲公も薨じ、加賀藩における本書の編修事業は全く停頓した。

これより先、享保四年（一七一九）、物産研究に熱心であつた八代將軍徳川吉宗は本書のことを聞き、松雲公と懇意な間柄であつた大学頭林鳳岡を通じて本書を求めた。公はその未定稿であることを理由にして辞退したが、吉宗はしばしばこれを懇請したので、公は同年九月十一日ついにこれを献上した。享保十七年<sup>(三)</sup>（一七三二）、吉宗は加賀藩の稻生新助（若水の子）、前記内山覚仲の二人を江戸に召出し、若水の門人で名物・物産の学に詳しい官医丹羽正伯を助けて本書を統修せしめた。正伯らは若水の編修方針を

正確に踏襲して業を進めた。

同時に、吉宗はその参考資料とするため、享保十九年三月二十一日付を以て全国に触書を出し、各地の産物の名称とその絵図を書き上げさせた。その原文は

此度丹羽正伯書物編集之義ニ付諸国之産物俗名并其形図々江承合申儀も可有之候間正伯相尋候申申聞候様一御料は御代官私領は其領主且地頭并寺社領は其支配頭江より可被申渡候已上

享三月

右向々江可被相触候

というものであつた。この調査は、村、郡、藩の各段階を経て、<sup>(四)</sup>国ごとにとりまとめ、元文三年ごろまでに幕府に提出された。後述のように、庶物類纂の内容は博物に関する漢籍の抄出である。正伯らはこの産物書き上げを名物学的立場から和漢名の比定、考按の参考資料として利用したのみであつて、往々世間に誤解されているように、これを本文中に挿入したり、あるいはこれに基づいて記述したのではない。

かくて六年後の元文三年（一七三八）五月には、統修分<sup>(六)</sup>十七属、合せて六百三十八卷、二千二百十四種を完成し、<sup>(七)</sup>



最初に若水が予定した一千巻に到達した。幕府は正伯に銀百枚、これを助修した正伯の子仙助、正因、加賀藩の内山寛仲、稲徳一郎、八任元迪、町医田中益庵、滝正貞らにもそれぞれ金品を賞賜した(八)。

のち、延享二年(一七四五)冬、さらに遺漏を補うべき命があり、正伯らは草・花・鱗・介・羽・毛・木・果の八属について合せて五十四巻百八十餘種を増補し、同年の冬竣功した。前・後編(九)・増補合せて一千五十四巻、二十六属、三千五百九十種の漢籍文類聚は、若水・正伯の師弟二代の努力が実を結んでここに全部完成した。はじめ若水が着手した元禄十年から五十一年目であった。正伯は自叙(一〇)・凡例を添えてその浄書本を幕府に進呈し、幕府はこれを紅葉山文庫に収蔵。その後、明治十七年内閣文庫に移されて今日に至った。

## 資料

本書の編修に当って若水や正伯が使用した漢籍はきわめて多数に上ったであろうと推定される。若水は加賀藩の文庫蔵書を利用したのみならず、松雲公は別に毎年図書購入費として五十両を与えたので、若水の蔵書は漢籍六万巻、

和書の無版本の抄写したもの一万巻に近かったといわれている。(先哲叢談続編)。

正伯は幕府の紅葉山文庫の豊富な蔵書を存分に使用した。その事実は同文庫の『御書物方日記』によって容易に立証することができる。すなわち享保十九年から延享三年頃にかけて、丹羽正伯御用として府県志そのほか多数の漢籍を出納した記事がしばしば見られる。

本書中に抄出した出典の書名は各条下に注記してある、その書物は古代から清朝にわたり、その内容はきわめて多種多方面のものであって、小学書、本草書、農書、譜録類など博物に関係の深い文献はもとより、『魏書』・『元史』などの史書、『広輿記』・『東西洋考』などの地理書、『太平御覽』・『淵鑑類函』などの類書、『文献通考』・『大清会典』などの政書、『西陽雜俎』・『夢溪筆談』などの隨筆類から『東坡文集』・『楊升庵先生文集』などの詩文集にまで及んでいる。和書は全く採録していない。

特に顯著なのは地方志であって、『福州府志』・『太平府志』・『永嘉県志』といった明清の府・県志が広範に利用されている。これら府県志に見える産物の記載は物産研究の好資料であるから、徳川吉宗は早くからこれに注目してそ

の収集につとめ、長崎奉行に命じて舶載書を購入し紅葉山文庫に儲蔵していた。加賀藩の蔵書にも府県志が多かったことは、今日の尊経閣文庫を見ても明かである。丹羽正伯はその両文庫を十分に利用したことを自叙の中でも述べている。

前記のように庶物類纂は動物、植物、鉱物その他三千五百余种を、草・花・鱗・介・羽・毛・水・火・土・石・金・玉・竹・穀・菽・蔬・海菜・水菜・菌・菰・造釀・虫・木・蛇・果・味の二十六属に分けて、広く漢籍中からその関係事項を抄出、類集したものである。この二十六の綱目や品種の数は『本草綱目』や貝原益軒の『大和本草』のそれに準じて、さらに大幅に増加、整理されている。その結果、本書に収められた品種は、旧来の本草書に見るような薬物中心のものでなく、きわめて広範囲となり、博物学的な性格をもっている。それで本書を、わが国における博物学の先駆的な業績と見ることもできる。

次に、本書の編修方法は、中国古来の類書の編修と同じく、あらゆる古典から関係記事を類集するという客観的な

手法をとっており、編者がこれを要約して記述したものはない。しかしながら、採用すべき文献の取捨、選択について編者の主観、力量が加わっているのみならず、編者の意見は按語の形で、必要に応じて随所に本文中に挿入されている。若水が編修した前編九属の中では、「謹按」の語を冠して、本文より一字下げて書き、また後編では正伯（貞機）はこれと区別するために、「機謹按」の三字を冠して、同じく一字下げて記入している。ただ、若水の按語が、多く名称と実体の老定など、名物学上のそれであるのに比して、正伯の按語は本文、文字の校異に関するものが多いところに差異が認められる（一二）。

また、一種ごとに、その和名を考定して初めに掲出しているのが本書の眼目であって、それが、単なる類書でなく「名物学」の一大文献として本書を性格づける特長である。それは若水、正伯のような当代名物学の権威によってのみよく成し得たところであろう。正伯の自叙にも、庶物の名称を正して医薬、食膳、贈答、作詩等の面で誤なからしめることを編修の目的としている。この和・漢名の比定にあたって若水は自ら植栽実験し、正伯は諸国に採集した折の見聞や、唐土の商人に博物の名義を訊ねるなどして研究を

重ねたほか、前述した諸産物の書き上げに記された、地方の名称や絵図を十分に活用した。和名が、諸国共通の場合には国名を記さず、地方によって名称を異にする場合は、いちいち「山城州」「播磨州」のように国名を注している。

この和名の記載が既に若水の当初から記されていたことは、正徳元年に松雲公が稿本を検したとき、和名の万葉仮名が読み難いとして片仮名を加えさせた事実からも知られる。

徳川吉宗はその多彩な治績の中でも、実学の奨励、殖産振興政策や、財政緊縮政策の一環としての貿易対策などに特色をもち、その具体策として物産研究に力を入れ、甘蔗及砂糖の生産、胡麻油、檀などの油料作物や甘藷の栽培につとめたことは著名である。また、輸入品中の大宗である菓物の国内生産を奨めて自給度を高めるため、菜園を開設して栽培、研究せしめ、しばしば採葉使を諸国に派遣して巡歴せしめた。庶物類纂の続修もそうした殖産政策の基礎的研究として完成を急いだものと考えられる。従って本書が博物学的、名物学的性格をもつことも当然であろう。またこの編修のために諸国の産物調査を命じたことは、全国的に物産研究熱を普及せしめ、各地に物産会が興り、博物学の著述が行われ、その方面への関心が深まった。庶物類

纂とその編修事業は、こうした歴史的背景や影響を考察することによって、さらによくその特質を理解することができる。

内閣文庫本四百六十五冊は、延享四年（一七四四）十一月に、丹羽正伯が浄書、献上した本であって、最も信憑すべきテキストというべきである。版心に「庶物類纂××巻」と摺込んだ、匡郭四周单边、無界の料紙を用い、每半葉九行二十字、注双行の規格に揃えて正楷で謹書し、全体に数筆より成っている。本文には朱筆で句点を加え、返点、送仮名を墨書し、版心には属名、種名、巻数、丁数を細字で記入してある。表紙は、品属により、薄青色紙、同色に唐草模様から押しのあるもの、黄褐色紙に波模様から押しのあるもの、の三種があり、その区別は必ずしも前・後編の別には一致しない。第一の表紙のものには、子持枠つき、大字で書名を印刷した題簽を貼付し、書名の下に属名と巻数を双行に注記してある。唐草模様のある表紙には、匡郭が無くて小文字で書名を印刷した題簽を、黄褐色表紙には書題簽を用いている。すべて六十枚前後を一冊に装订

し、数冊ごとに紙帙に収めている。毎冊首に「秘閣図書之章」「大学蔵書」の朱大方印(二三)を押してある。ほかに、序文、凡例二冊を添える(二四)。全般に書香はなほだ高雅な趣がある。

内閣文庫所蔵の他の一本百十二冊は天係十五年から弘化三年にかけて幕府の医学館で書写した本であって、多紀元暁、喜多村直寛その他の自筆奥書を備えている。うす様の料紙を用い、字配りなど右の紅葉山文庫本に同じであるが、ただ、花・介・玉・竹・蔬・虫の六属において紅葉山文庫より巻数が少ない。それを表示すれば、

医	76	7	18	30	72	88
楓	80	15	25	36	166	95
花介玉竹蔬虫						

という差異を示している。その内容を比較、検討してみると、これらの差は脱落といった単純な理由ではなく、成立過程に生じた異本であることを推測せしめるが、詳しくは後考にまわりたい。内務省、農商務省旧蔵本である。

金沢市立図書館に所蔵する二百十三冊本は、もと前田家尊経閣文庫にあった本で、同文庫から移管されたもの。二十六属完全に揃い、摺題簽を有する浄書本であるから、若

水が編修した時のものではなく、幕府が、編集完成後に副本を作って前田家に贈ったものと推定される。なお、同館にはこのほか、抜萃三冊や、「庶物類纂御献上之儀ニ付留」一冊、「庶物類纂編集に関する書翰集録」(高木多仲)一冊などの関係記録も架蔵している。

国立国会図書館に四百十五冊の写本がある。「明治九年文部省交附」の印記がある新写本である。ほかに抜萃一冊や竹属の残本一冊(横山由清、白井光太郎旧蔵)などもある。

武田薬品工業株式会社研究所図書館に二百八十冊本がある。同館宮下三郎氏の御示教によれば、そのうち十六属二百五十八冊は昭和初年の新写本で、また前医学館本の一部が早く分散していたらしく、喜多村直寛の奥書を有する介・蛇・木・果・増補鱗・増補介の六属二十二冊がこの本に補配されている。

京都大学図書館谷村文庫にも江戸末期写の残本八冊を所蔵する。

なお、内閣文庫に右の献上本に併せて、『庶物類纂図翼』と題する精鈔本二十五卷草本別録二卷添書一冊合せて二十八冊を蔵する。これは菓草類の写生画集であって、その描

写は葉、花、根の細部にいたるまで正確、精密をきわめ、鮮麗な手彩色を施し、いちいち和漢名を注している。著者は幕臣戸田祐之である。通称は要人、戸田頼母高猶の長子で、母は紀州藩の儒医のちに明律研究で知られた高瀬学山

(喜朴)の女である。安永八年に五十四才で歿した。若年

より薬草を好み、本草書所載の草類を写生し、安永八年四

月幕府に献じたものが、すなわちこの本である。幕府は植

村左源次、植村政勝、田村元長の三名に命じてこれを検閲

せしめたところ、有用の書であるから庶物類纂に添えて収

蔵して然るべき旨を答申したので『庶物類纂図翼』と命名

し紅葉山文庫に架蔵した。しかしながらその内容や成立の

動機は『庶物類纂』とは直接の關係は無く、図画の品目は

類纂の草部のそれとは全く異なるものである。

『庶物類纂』の管見に入つたものはおおむね以上のとおり

で、伝本は非常に少ない。小野蘭山が手写したと伝えられ

るほかは、伝写されることもなく大部なために上梓も容易

でなかつた(一七)。流布本が無く、学者が利用、翻閱する

機会が乏しかつたので、その内容が誤り伝えられることな

どもあつた(一八)。

前述のように、本書の内容は文献集覽であつて、事に応

じて学者が容易に参照できるところに価値がある。ようや  
く今日に至つて、この大著がマイクロフィルムの形で複製  
され、そうした要望に沿いうる態勢が整つたことはまことに  
慶賀にたえないところである。

### 参考文献

有徳院殿御実紀

右文故事(御代々文事表)

御書籍來歴志

御書物方日記(内閣文庫蔵)

近藤磐雄 加賀松雲公

白井光太郎 日本博物学年表

日本学士院 明治前日本生物学史

同 明治前日本薬物学史

### 補註

(一) 「食物伝信纂」の内容や編修方法は本書と全く軌を一に  
するもので、庶物類纂はこれを増広したものと考えられる。

若水の著述には、このほか「詩経小識」など数種の本草書が  
あり、正徳四年に「本草綱目」を校刻したことも著名である。

(二) 享年六十一。門人に松岡恕庵、丹羽正伯、野呂元丈ら  
があり、いずれも若水の名物学をうけついで。明治四十二年に

従四位を追贈された。

(三) 統修着手の年を享保十四年あるいは享保十九年にかけて文献もあるが、いま丹羽正伯の自叙に記すところに従った。

(四) 江戸幕府日記、同日の条による。近藤正齋の編修した法令集「憲教類典」には、「編集之義」を「編集候義」「産物を「銘物」に作っている。

(五) 今日、その進献本は伝存しないが、諸国に残された副本が、産物帳と呼ばれて若干知られている。

(六) 水・火土・石金・玉・竹・穀・菽蔬・海菜・水菜・菌・蕨・造醸・虫蛇の十七種である

(七) 正伯凡例にこの数を二千四百種と記しているが、いま自叙によった。

(八) 江戸幕府日記、元文三年五月三十日の条。

(九) 正伯は、若水が編集した九属を前編、元文三年までに正伯らが統修した十七属を後編と称して区別しているが、内閣文庫所蔵の原本にはそうした呼称や二十六属の順序などを全く題識していない。

(一〇) 経済雑誌社大日本名辞書や平凡社大人名事典は「セイハク」とよんでいるが、彼は医家の通例として呉音で「シヨウハク」と呼ばれたらしい。御書物方日記享保十二年一月十三日の条に「昌伯」と誤記しているのもその傍証となる。

丹羽正伯、名は貞機。元禄十三年(一説は三年)伊勢松坂

に生れ、医家山脇玄修、儒家並河天民や稻生若水に師事した。のち幕府の医官に挙げられ、下総小金野に薬草栽培を管理し、また植村政勝らと共に諸国を巡歴して薬草を採集した。吉宗の命をうけて林良適と共に簡便処方集「普救類方」を著し、享保十四年これを官刻、頒布したほか、数種の著述がある。

宝暦二年(一七五二、一説に六年)歿した。内閣文庫に所蔵するその著書「東医宝鑑湯液類和名」の奥書に「享保十一年丹羽正伯元機」とあり、また同じく「海鱈之図」の自序にも丹羽元機と署名している。年代や内容からみて同一人と考えられるが、この二書のみ「元機」と改めた理由は明らかでない。

(一一) 若水は「経史子集、裨官野乘、九流各家」のみならず「明代各省府志県志」を探索したいと表現している(正伯の自叙)

(一二) 御書物方日記享保二十年閏三月十日の条によると、地志のうちでも名山志、遊覧志の類には物産の記載が無いから、出す必要はあるまいと正伯に尋ねたところ、それらの書にも文章の間に、まま有用の記事が見えるから一応出してみてくれと答えた旨、記されている。正伯が博くかく丹念に文献を漁った一面を物語っている。

(一三) これら正伯の校語は精密、該博である。また、まれに

は内容についての注記もあって、例えば竹属巻十二、竹実の項には、明田芸衡の「留青日札」から抄出した鶏卵大の竹実の記事に加えて、元文元年飛騨国から発見された「化魚」と呼ばれる巨大な竹実について記載している。恐らく産物書き上げから得た知識であろう。

(一四) 前者は明治初年、太政官修史局が紅葉山文庫旧蔵書を管理していた当時、その書物のすべてに押し印であり、後者は明治二年から四年まで教育行政官庁であった「大学」で新収書に押したものであるが、本書が一時、大学に架蔵された経緯については詳かにしない。

(一五) その一冊は寛延元年の朝鮮信使朴敬行、趙徳祚、寛延

### 学会に寄贈された図書を紹介

スイス・ベルンのフーベル書店より同社発行の医学と自然科学の古典集 Hubers Klassiker der Medizin und der Naturwissenschaften の第一冊と第二冊が贈られた。

第一冊は Felix Platter : Observations, I. Buch. Funktionelle Störungen des Sinnes und der Bewegung. 第二冊は Anbroise Paré : Rechtfertigung und Bericht über meine Reisen in Verschiedene Orte. 共に Verlag Hans Huber, Bern u. Stuttgart. 1963 年。

二年琉球蔡宏謨の三序を宝曆三年(一七五三)に書物奉行深見新兵衛がとりまとめたものであり、他の一冊には延享四年丹羽正伯の自序、正徳元年の朝鮮信使李曠(東郭)、宝永七年室直清の両序のほか、「正補庶物類纂凡例」を収める。凡例には編修の沿革をはじめ、種属の分類、排列、記載上の取扱方法等について詳しく列挙、説明してある。

(一六) 松浦静山「甲子夜話」巻四七。

(一七) はじめ松雲公はこれを刊行するつもりであったが実現しなかった。

(一八) 例えば、榊原芳野「文芸類纂」巻六にそうした記述がある。

簡単に紹介すると、前者はパーゼルの市医で教授であったフリックス・プラッテル(一五三六—一六一四)の症例集とも云うべきもので、原著はラテン語であるが、それが独訳されたのはこれが最初であると云う。独訳者は Dr. Phil. Günther Goldschmidt をして、パーゼル大学の医史学教授 Dr. Mel. Heinrich Buess が整理し解説を付けてこの一冊を成した、プラッテルの「症例集」はあと二冊分できる予定で、この既刊第一冊は副題にあるごとく「感覚および運動の機能的障害」となっている。

プラッテルは十六世紀後半から十七世紀にかけて活躍した実地医家であり人体解剖も数多くおこなない、当時のヨーロッパで著名の医者であった。とくに神経病学、精神病学での先覚者である。その生涯におよそ三百体の解剖をしたといわれる。彼はスイス生れでモンペリエで学び、早くも一五六〇年にパーセルの医学教授となり、その職に五十四年間もとどまった。

第一冊では二百以上の番号（この番号は原著にはないらしい）を付した各症例が廿二項に分類されている、その項目の数個をとりあげてみると、精神薄弱、意識障害、狂者についての観察、触覚の障害、視覚障害、聴覚障害、運動の不能などである、プラッテルの観察の鋭さがいたる所にみられて興味ふかい。

こういうラテン語の本は私どもがもし入手できても読むことが殆んどできないので、ドイツ語に翻訳されて私どもその気さえあれば読みうるようになったのは実にありがたいことである。

第二冊は十六世紀に外科の大革新をやったアムブロアス・パレー（一五一〇—一五九〇）の著作をフランス語から独訳したもので、これも独訳は初めてらしい。題名は「弁明と諸地への我が旅行の報告」である。弁明というのは一五八〇年にパリ—大学医学校の Etienne Gournelen がパレーの外科上の業績に対して非難をあげたのに答えて、パレーが自分の立場を弁明する文章を発表したのである。

パレー全集は原著がフランス文で書かれているが、この弁明文は初めて第四版（一五八五）に載つという、いま手許にある第七版（一六一四）をみると、終りの二十頁ほどを占めていて、その題は *Apologie et traité contenant des Voyages faits en divers lieux* となつてゐる。

その弁明は傷口に烙鉄を用いて止血する愚を指摘して血管を結紮することがはるかに有効であることを多くの実例をあげて主張するのである。相手のグルメランは外科を得意とし、パリ—医学校の学長であったが、パレーは鋭い語氣でその学長をやつつけている。温健な人格者といわれるパレーも人命を救う大きい真理をつかんだ場合、ひじょうに勇敢な議論をして、相手の誤りを説き伏せねばやまないものである。本書を読んでその点にとくに興味を感じた。

「諸地への我が旅行の報告」というのが一五三六年から三十四年余にわたる数多くの戦争にパレーがいつも従軍したことを示しており、その頻繁な回数にまず驚かされる。そして最初の一五三六年トリノへ出陣のところで、銃傷の治療にあたり、熱した油を傷口につけることを止めて、資料欠乏のため有り合せの卵の黄味とバラ油とテルペンティンを使用した。その夜、彼は心配でよく眠れなかったが、翌朝早くおきて患者をみて廻つたら、間に合せの材料をつけられた者の方が定石どおりに熱油で処置されたものよりはるかに良くなつていたという有名な彼の経験談が述べられている。そのときパレーはまだ二十六才の若さであった。こういう話も彼じんの筆になる文章だから、翻訳とはいへ、迫力がある。（小川鼎三）



## 東京医大蔵貴重古医書解題

東京医大図書館では館長原三郎教授が熱心に収書につとめられているが、先般卒業生の篤志家から約一五〇〇冊五二四部の古医書の寄贈をうけた。早速図書館員の手で整理され仮目録が作成されたのを機に、とくに学術上貴重書とみるべきものに簡単な解説を付して別置することになった。そこで原館長の委嘱をうけ石原が主として解説を執筆した。貴重書としての撰出基準は必ずしも伝存まれな珍本にとらわれず、医史学資料として重要なものを主眼とし五二四部の中から二五部を撰出した。うち洋書二部を含む。寄贈書のうちとくに貴重書の大部分を含むコレクションは昭和四年卒の内野正幸氏のものである。氏は産婦人科と外科が専門で現在品川区中延に病院を開いており、戦後、自分の専攻する領域の日本における史実を調べるため、巨費を投じ

矢数道明  
石原明

て長年収集され、その結果昭和二八年に「産科婦人科臨床余録」と題する著述を公刊し、これを機に史学を断念され、資料一切を寄贈されたのである。氏は趣味豊かで三惠と号し書画、俳句、篆刻をよくする。蔵書印は自刻で『金秋居書笈蔵』の六字を古文で刻してある。他に「俳筆中津川」「芭蕉絵物語」その他随筆集数種の著書がある。神奈川県中津川出身。

もうひとつのコレクションの寄贈は島根県飯石郡吉田村の渡部潔氏（昭和五年卒）で、傷寒、金匱、外台、千金、本綱など一般漢方医書が多く、氏の九代前の祖は栗崎道意（栗崎流外科七代目）について南蛮外科を学んだという名家の累代の家本である。次にやや順不同ながら二五部の貴重書解題を列記する。

○雲陣夜話 曲直瀬道三著 永禄十一年(一五六八)写、永禄九年に道三が毛利元就の請により出雲に下向の際、門人の希望によって道三流の秘伝を記し与えた書。著作後二年に当り是白なる門人が書写した旨の奥書がある。

○阿蘭陀本草書 著者不詳 宝永七年(一七一〇)写、オランダ語の薬名に和訳を付して同定し効能を記してある。能毒式の簡単な記載であるが、蘭薬をテーマとし年代も古い点が珍らしい。呉秀三氏旧蔵。

○遐齡小児方 曲直瀬道三著古写。永禄九年(一五六六)出雲下向の途次、求めに応じて門人に与えた書で、小兒科専書として著名の文献。著作後間もなきころの古写本。

○キニッポヒ本草目録 著者不詳 写。蘭書の中から植物名を抜き和名を付して同定している。キニッポヒは未詳。他に伝本をみない。

○金瘡 小笠原貞成伝 慶長十七年(一六一二)写。小笠原流金瘡の秘伝書で巻末に始祖長時よりの系図を記す。紺紙金泥模様の表紙に丹紙題箋、ウグイス色に四季山水金描の見返しをつけた豪華な原装本。

○金瘡跌撲療治之書 西玄哲編 明和七年(一七七〇)写。西流外科の秘伝書。その起源はルネッサンスのフランス外

科医パレーに発す。この蘭訳本に基き楳林鎮山が抄訳した「紅夷外科宗伝」をさらに享保十八年(一八三三)に西玄哲が改編したものである。洋式風俗の彩色図が美しい。

○外科起癢 鎌田玄台著 嘉永二年(一八四九)刊。華岡青洲の高弟、伊予大洲の鎌田玄台の治験録で全十冊。彩色刷の美本、華岡流外科の文献として水戸の本間玄調の「瘍科秘録」と並び称せられる重要資料であるが、全揃の完本は伝来稀少。呉秀三氏旧蔵。

○外科金瘡 著者不詳 元和七年(一六二一)写。元奥書により原本は康応三年(一三九一)の成立であるという。しかし康応は北朝年号で二年しかない。偽撰ならば周知の年号を用いるのが常であるし誤写とも老えられない。この点かえって乱世の成立である証とみてよい。用具の図入。

○外科金瘡之書 岩永寿軒伝 寛文五年(一六五五)写。内題に「秘伝金瘡拔書」とあり、巻末に門人に伝授の詞書がある。内容は三五条にわたり金瘡の秘訣を記した伝書。もと粘葉装いま線装に改む。

○外科取功 大槻玄幹訳 文化十一年(一八一四)刊。ヘイステル外科書の抄訳で「瘍医新書」の一部をなす包帯法の一編を単行本としたもの。「瘍医新書包縛編」と題する

のが正しいが、当時包帯法の需要が切実だったので分立出版した。彩色刷。大垣の蘭学者江馬春齡旧蔵。

○外科直至選要集 編者不詳 安永五年（一七七六）写。卷十六、十七の零本。ルネッサンスのフランス外科医アンブラス・パレーの書を蘭訳本より抄訳した南蛮流外科伝書の一つで、楢林鎮山の「紅夷外科宗伝」と別本。惜しむらくはわずか二巻の零本のみで詳細を知り得ない。他に伝本あるを聞かない。

○外療新明集 鷹取秀次蔵 近世初期写、現存上巻のみ。天正九年（一五八一）に著述されたものの古写本。巻頭欠の上巻だけであるが彩色図があり、流布刊本以前のテキストとして貴重。

○三語便覧中喞蘭拔萃 海上随鷗（二代目？）編 安政六年（一八五九）写。村上英俊の「三語便覧」の中からオランダ語だけを抄出したもの。奥書の随鷗は年代的にみて二代目か。

○砂虱療治方 新発田甫中著 文化十一年（一八一四）写。越後にみられるリッケッチア疾患の最初のモノグラフで恐らくは自筆稿本であろう。ツツガムシなど多くの図が描かれている。

○〔周朱・陳振先復命書〕 向井元成編 江戸中期写。享保十一年（一七二六）に長崎に来た清人医家二名の復命書を合せ写したものの前書は珍奇な薬物の効能に関する解説で、後書は陳氏が長崎近傍で採集した薬草一六二種の解説である。

○救急遺方 朝鮮版 宣徳三年（一四二八）序刊。見返しに弘治七年（一四九四）の賜記あり。内容は上巻が「加減十三方」下巻が「経験急救法」を収めてある。

○〔針治諸虫論〕 著者不詳 近世初期写。標題紙「古写本針灸秘書」とあるがこれは近年の筆。巻頭数葉を欠くため原書名不詳。巻中に前掲の題名があるところをみると恐らく数部の針の秘伝書を一冊に写したものであろう。彩色ある五蔵図が存するので中世解剖図として貴重な遺品。

○神農秘伝書 著者不詳 寛永八年（一六三一）写。帙には「神農秘伝金瘡伝」とあり表紙には「金瘡一部之事」とある。室町時代に盛んであった神農流金瘡の伝書。呉秀三氏旧蔵。

○真本千金方 唐・孫思邈著 天保三年（一八三二）刊。典葉頭和気家に伝わる古写本を幕府医官松本幸彦が原形のまま模刻したもの。朱刷のオコト点声点あり。本書の原本

は現存しないのでこの模刻によってのみ旧態を知ることが出来、文献学的に重要なテキスト。紙背文書も歴史的に価値が高い。

○詭腹証奇覽 和久田叔虎著 写。師の稲田文礼の「腹証奇覽」に対する私見をまとめた書で他に伝本をみない。漢方独特の診断法として知られる腹診法の文献として臨床上興味が深い。

○明星抄 著者不詳 寛文六年（一六六六）写。流派不明の眼科の秘伝書。彩色図入り、巻末に六三首の眼病秘伝和歌を付す。自筆伝書。

○葉種油取様並性能毒 中島清左衛門等伝 寛文十二年（一六七二）写。出島のオランダ人直伝と称する製葉の伝書で六名の通詞の連名がある。付図一冊は彩色ある装置図。○ヲスカンプ本草書目録 編者不詳 写。古渡蘭書の植物書として著名のヲスカンプの目次だけ抄出して和名を注記したもの。植物の同定上重要な文献。

○ウエンツェル背部疾病書 一八二四年刊。

Wenzel, Carl : Krankheiten am Rückgräthe. Bamberg,

Wilhelm Ludwig Wesche. 1824 本書はとくに脊髄を中心とした疾患のモノグラフで、多くの図版により脊椎カリエス

などの疾患を記したものととして当代類のない医書である。藤浪剛一氏旧蔵。

○ヘイステル外科書 一七三一年刊。わが国の蘭学医家に重視された外科書の第三版。

Heister, Laurentii : Chirurgie. 3 Aufl. Rurnberg, Johann Hoffmanns. 1731.

久保猪之吉氏旧蔵。

東京医大図書館ではこれら貴重書を含む古医書はほぼ整理を完了し仮目録が出来ている。原則として個人の館外貸出は禁止されているが、ゼロックス複写の便があるので希望者は所定の手続をへて利用されたい。

なお、ここに掲げた貴重書は昭和四十年一月三十日に日本医史学会例会を本館で開催した際、展示公開した。

# 昭和四十年年度日本医史学会例会記事

## 一月例会

日時 一月三十日(土)午後二時～五時  
 会場 東京医大病院図書館四階閲覧室  
 演題 東京医大図書館所蔵古医書の解説  
 漢方治療書関係

矢 数 道 明  
 外科オランダ医書関係  
 石 原 明

## 出席者(敬称略)

平塚 俊亮 福島 博 馬場 明 谷津 三雄 馬場 明  
 鮫島 近二 久志本常孝 小川 鼎三 中泉 行正 齋藤 仁男  
 杉田 暉道 原 三郎 堀部 真広 片桐 一男 古川 明  
 小林 立德 矢数 圭堂 赤松 金芳 本間 達雄 石原 明  
 大塚敬次郎 吉田 一郎 竹内 薫兵 大鳥蘭三郎 出月 三郎  
 今田 見信 佐藤文比古

## 三月例会

日時 三月六日(土)午後二時～五時  
 会場 順天堂大学五号館会議室  
 演題 大槻玄沢の西賓対晤について

大 鳥 蘭三郎  
 尾台榕堂の祖先と家族  
 吉田 一郎  
 (欠席)

## 出席者(敬称略)

福島 博 新井 正治 小川 鼎三 大鳥蘭三郎 石原 明  
 本間 達雄 緒方 富雄 馬場 明 谷津 三雄 武田 充弘  
 片桐 一男

## 六月例会

日時 六月二十六日(土)午後二時～五時  
 会場 東大医学部中央図書館二階資料室  
 演題 杉田玄白述「犬解嘲」について

田口和美と今田東  
 片桐 一男  
 小川 鼎三

## 出席者(敬称略)

片桐 一男 福島 博 新井 正治 森 於菟 関根 正雄  
 佐藤文比古 石原 明 出月 三郎 三木 成夫 大鳥蘭三郎  
 岸本 頼子 鮫島 近二 本間 達雄 緒方 富雄 栗原 広三  
 馬場 明 久志本常孝 神谷 敏郎 川島 恂二 浅見 一羊  
 小川 鼎三

## 七月例会

日時 七月二十八日(水)午後十二時半  
 会場 三越劇場  
 挨拶 蘭学事始百五十年記念会 総裁 三笠宮  
 講演 蘭学事始について 緒方 富雄  
 十七世紀アムステルダムの力士パッタ氏について  
 オランダ大使 ファン グーリック

九月例会

日時 九月十一日(土) 午後一時〜五時

会場 東大医学部中央図書館二階資料室

演題 理存する江戸時代の実証解剖

蘭館医デ・ホウトの死について

東大名誉教師スクリバとその後裔

石原 明  
大鳥 蘭三郎  
緒方 富雄  
小川 鼎三

出席者(敬称略)

川島 恂二 福島 博 久志本常孝 片桐 一男 新井 正治  
佐藤文比古 小川 鼎三 鮫島 近二 緒方 富雄 鈴木 勝  
谷津 三雄 高橋清一郎 川畑 紀義 城戸 石原 明  
岸本 頼子 本間 達雄 山田 光胤 藤井 美樹 大鳥蘭三郎

十月例会

日時 十月三十日(土) 午後二時

会場 順天堂大学医学部五号館二階会議室

演題 曲直瀬道三の手紙

一プロローガの運動性言語中枢の発見をめぐる

川島 恂  
萬年 甫

出席者(敬称略)

岸本 頼子 平山 廉三 広川 勝豆 香山 保幹 宮本 忠雄  
石原 明 大鳥蘭三郎 小川 鼎三 萬年 甫 川島 恂二  
馬場 明 片桐 一男 鮫島 近二 大東 昭雄 本間 達雄  
三木 成夫 中島 晋 石間 祥生 豊倉 康夫 中西 孝雄  
須田三千子

編集後記

毎号発行のおくれをおわびするばかりでなんとも恐縮の至りです。本号から待望の阿知波博士の論文を連載する。大体四回に分けて掲載する予定である。大方の御期待を乞いたい。原著をなるべく多く載せたいので各位の絶大なる御協力をお願いする。

(大鳥)

ベッサリウスの古刊本をこの機会にどうぞ

## ANDREAE VESALII

*Humani  
Corporis  
Fabrica*

### REPRINT, First Edition of 1543

Offset Printing on "Antique Laid" Papers  
Beautifully Illustrated & Splendidly Bound  
Large Folio: 28×42cm, 700 pages

### LIMITED AND NUMBERED EDITION

US \$ 37.00

Bfrs 1,800.-

運賃込価格  
¥ 14,800.00

Order now to & Reserve your copy from:

**PERIODICA JAPONICA, INC.**  
HONGO 1 TOKYO

株式会社

ペリオディカ ヤポニカ

東京都文京区本郷1-2 美エビル  
電話 東京 812-6770・7993  
振替 東京 60776

予約限定版です故、再度の入手は全く困難です

## ●富士川 游先生 生誕100年記念出版

# 日本醫學史 綱要

富士川游先生の日本医学史における功績はまことに偉大にして不朽である。ことし昭和40年は先生が慶応元年(1685年)広島県に誕生されてから正に100年にあたる。

富士川先生の著書としては「日本医学史」(明治37年刊)、「日本疾病史上巻」(明治45年刊)、「日本医学史綱要」(昭和8年刊)が最も重要であり、いずれも20世紀前半の日本を代表する稀代の名著で、多くの年月を経た今でも、その内容の価値は、その後に出た類書が足もとにも及ばぬくらい高い。しかしその名著も、近年は入手切望者が容易にその望みを達せられないのが実情である。

わが社はここに、日本医史学会が富士川先生生誕100年を記念して「日本医学史綱要」を複製出版するにあたり、これを世の読書士に提供するため、乞いて出版することにしたものである。

A5判 335p/¥2,000 円120

医歯薬出版株式会社

東京都文京区駒込片町32  
振替東京13816・電話東京(942)0101(代)

# NIHON ISHIGAKU ZASSHI

---

Journal of the  
Japanese Society of Medical History

---

Vol. 11, No. 4

Nov. 1965

---

## CONTENTS

### Original articles

- The influence of European medicine an Japanese surgry  
..... Goro Achiee.....(1)
- "Kenkaicho" written by Genpaku Sugita  
.....Kazuo Katagiri.....(27)
- The Demon appeared in sacred books of "Doshi" and  
"Kyuryo" ..... Kido Sugita.....(40)
- Preparation of the manuscript of "Shobutsu-ruisan"  
and its hand written copies.....Tamotsu Fukui.....(45)

### Materials

- Guide to the rare books and mnuscripts in medicine  
collected by Tokyo Medical College  
..... Domei Yakazu.....(55)
- Akira Ishihara

List of donated books ..... (39) (53)

News .....(59)

---

The Japanese Society of Medical History  
c/o Department of Medical History  
Juntendo University, School of Medicine  
Hongo 2~1, Buvkyo-ku, Tokyo.